

昭和ノスタルジー／ロリマゾ（蕾の悦虐）

# 首輪とピアスは 服従のちかい

昭和四十五年度

卒業証書授与式

窓召少学校



原 案 W I L L 様  
小説化 濠門長恭

## 目次

着衣で卒業式.....	- 3 -
両親の位はい.....	- 7 -
正しい着け方.....	- 9 -
おだやかな日.....	- 10 -
雨の日も全ら.....	- 17 -
弟妹の身代り.....	- 20 -
ワイセツ対策.....	- 33 -
女子のランチ.....	- 44 -
ランチを志願.....	- 57 -
夏には海遊び.....	- 65 -
留守番のワナ.....	- 74 -
ヤイトの仕置.....	- 79 -
生理の始まり.....	- 84 -
秋祭の大人姦.....	- 89 -
絵具の体操服.....	- 104 -
五郎様の精通.....	- 107 -
顔面便器の刑.....	- 109 -
山持家の権力.....	- 115 -
サチ専用の針.....	- 119 -
冬の防寒対策.....	- 133 -
冬には雪遊び.....	- 137 -

新年寒中水泳	- 141 -
誕生日の決意	- 145 -
エツ逆の花道	- 148 -
後書き	- 150 -

※本作品の舞台は半世紀昔の日本を髣髴とさせますが、あくまでもフィクションであり、実在する歴史・人物・地名・団体・年齢などとは一切関係ありません。また、現代では差別用語とされる単語や糾弾されるべき思想なども、半世紀昔には（かろうじて）許容されていたものです。仮に、そうでないものがあったとしても、それは登場人物の主観に基づくものであり、登場人物の性格付けに資する以上の目的はありません。

※この作品は教育漢字を原則として、例外的に、縄とか鞭といったSM必須漢字及び尻とか股といった身体の部位を表わす漢字を使っています。そのため、当て字を用いる場合があります。また、ヒロインの教育程度に合わせた誤用もあります。さらに厄介なことに、ヒロインが意図的に発するダジャレもあります（尻メツレツとか）。

以下に、当て字や誤記誤用の例を示します。

・当て字（正しい表記）

演段／逆待／流義／表白材（漂白剤）／変え歯（替え刃）／暴発（爆発）／完腸／包しむ  
／訓答（薰陶）／氷る／送入（挿入）／因質（陰湿）／感ぐる／好例（恒例）／強列

・誤記誤用（表現したかった意味）

金貨（奇貨）／不得意要領／イカリ心頭に達する／不明不休／門外不出（自動詞的用法）  
／もんどり転がる／元日の三日目

・なお、二十四時間を七万六千二百秒と記述している箇所がありますが、ヒロインの暗算によるものです。

## 着衣で卒業式

「久保田聡子」

名前を呼ばれて聡子ちゃんが立ち上がり、演段へ向かって歩く。ただひとりのフリソデ姿は、とても人目を引いて——サチに向けられていたのとはちがう、ほほえましい色合いの眼差しが注がれる。

聡子ちゃんは町会議員のゴレイジョウで、今日はいちだんと取りすましているけれど、サチは見ているんだからな。あなたがサチと同じすっぱだかになって、五郎様の前で土下座した姿を。

そんなことは忘れましたわって顔で聡子ちゃんが卒業証書の入ったツツをおしいただいて、お辞ぎをしてから横へずれて後ろの人とすれちがって、演段から降りる。

サチは最前列の左はしに居るんだけど、ずっと名前を呼ばれない。最後の子が証書をもらって演段を降りて席にもどってから、ようやく呼ばれた。

しらえきちめ  
「白江祥女」

卒業生も父兄も来ひんも注目の中、サチは立ち上がって演段へ歩く。一步ごとに、スリコギがオマンコをこねくり、荒縄の毛羽がメコ穴のふちをつきさす。コチンコに着けた名札のピアスが太腿にけられてゆれて、そのたびに小さなイナヅマが腰をくすぐる。乳首のピアスはセーラー服におさえられているので、ほとんどゆれない。ガニ股で歩けば下半身もすこしは楽になるけど、注目の的になってるから、女の子らしく太腿をすり合わせて歩いた。

校長先生の前に立ったときには、もう頭がぼわんとしていた。でも、証書をもらう前後のお辞ぎは忘れたりしない。机に頭がぶつかるくらいに、深々と上体をかたむけた。ので、お尻は丸見え。縦に食いこんでいる荒縄も、ケツマンコをふさいでいるヒョウタンも全校

生徒先生父兄来ひんに見られてしまった。ので、胸がきゅううんとねじれて、腰が熱くな  
った。

短い階段の上り下りが効いた。雲の上を歩くみたいな感じで、さらし者の席へもどつて。  
ケツマンコをヒョウタンがおし上げるのを感じながら、おしとやかに座った。

校長先生の式辞とかは上の空のうちに終わって。心と身体がちゃんとイスの上にもどつ  
たのは、来ひんの祝辞が始まったあたりから。

「六年生みなさん、卒業おめでとうございます」

ちっとも、おめでたくなんかない。

教育委員会のナントカ代理って人、最前列の左はしに座ってるサチをちらちら。どうし  
ても目が吸い寄せられてる。そりゃそうだよね。

晴れの式典だからって、いつもとちがう服装の子が多い。といっても、どこかのオボッ  
チャンとかオジョウサマといったのは少なく、三分の二くらいは進学先の制服。

サチも、その仲間だけど……こんなはずかしい格好は、オレひとりだけ。胸当てが無く  
て縄のブラジャーが見えてるし、すそが短くてヘソも丸出し。

なんて序の口。スカートなんて輪切りの布切れ。お尻のえくぼも足の付根のYのはしっ  
こも見えるくらいに引き下げて、やっとな割れ目がかくれる。ごくたまに街で見かける（と、  
大だんな様が言った）ミニスカートってのが、オトナの女の人でひざ上十センチとかせ  
いぜい二十センチだそうで——それでも、階段を上がってるところに出くわすとパンティ  
が見えないかと期待するんだって。大人なら、ひざ上二十センチでも股下が十センチはあ  
るぞ。

サチは股下ゼロセンチだけど、絶対にパンティが見えない。はいてないもんな。

ナントカ代理の人。まだ見てる。じゃあ、サービスしちゃえ——ひざの上に置いてたツ  
ツを胸元にかかえこんで足を開いてあげた。

代理の人、ぎょっとした目つきになって、あわててそっぽを向いた。

このほうが楽ちんだから、開いたままにしとこう。

代理の人がサチの股の間に見たのは、スリコギのはしっこ。生理のときは一分半（五ミリ）の荒縄を二重に巻いてるけど、今日は二分（七ミリ）を二重巻き。生理用タンポンじゃなくて、純すいなオマンコ責め道具だ。オマンコの中がパンパンなのは平気だけど、メコ穴のふちに毛羽がチクチクつきささってくるのが痛……気持ち良くて、もう縄はぐっしより。

オマンコの中をこねくられたくないので、浅くこしかけてるけど、そうするとケツマンコに逆さにつっこまれてるヒョウタンがケツマンコをおし広げようとする。前門のスリコギ後門のヒョウタン——なんてじょう談を考えられるんだから、まだ大じょう夫だよな。完腸なんて初めて（なのに、大人用のイヂチクを三つだぞ）だけど、ケツマンコを使われる前にいつもリットル単位の水を注入されてるから、メンエキになってるかな。

パチパチパチ……

いつの間にか、代理の人の祝辞が終わってた。卒業式は、エライさんが登場するたんびに起立礼着席をしなくていいから、物足りない……なんて、絶対に思っていないぞ。座るたんびにオマンコとケツマンコをつき上げられて痛い目には合いたくない。わざとそうしろとは、大だんな様もご主人様もサチに命令していないから。

次の来ひんは、山の向こうの学校の校長先生。サチたちの住んでる町は、一本の道路だけで陸とつながってる山（半島）の海側にある。だから、大きな街があつて鉄道が走ってるのは、山の向こう側ってことになる。

こっち側にも学校はあるけどへん差値が低いので、街にある学校を選ぶ子も多い。ご主人様も、大だんな様に言われてしぶしぶ。

サチはご主人様のどれいでおモチャでペットだから、お供させられる。向こう側だと、さすがにすっぱだかはまずいってんで、でも大だんな様の勢力下だから、こんな『制服』を着ることになった。

とう明なレインコート以外の服を着るのは十一か月ぶりだけど、こんなエロい服よりは、いっそ全らのほうがいいや。身動きするたびに乳首のピアスが布に引っ張られてし激され

る……のは、いやじゃないけど、気が散ってうっとうしい。こんなんじゃ行けないし。

いっそ、足を閉じて貧ぼうゆすりしようかな。コチンコのピアスが気持ち良くなるし、根元は二本の荒縄にはさまれてるから、毛羽がチクチクするし。

でも、大勢の知らない人に見られながら行くのは、いくらサチでもはずかしい。

もろ注目の的なものな。クラスも出席番号も無視して、サチの席は最前列の左はし。来ひん席の真ん前。しかも、ちょっとだけ他のイスからはなされてる。

大だんな様は、サチのことをリトマス試験紙だっておっしゃってたけど、意味は分かってる——と思う。サチが『性的に逆待』されている姿を見てどういう反応を示すかを、観察してるんだ。

だけど、サチに同情して『救おう』なんて考える人のすることは決まってる。三人きょうだいをばらばらにしてし設に放りこむんだ。それくらいなら、サチひとりがぎせいになる。一年前に、そう決心したんだけど……今じゃ、ちょっとあやしくなってる。決心がじゃなくて『ぎせい』のところ。

大だんな様やご主人様やおく様やお姉様、他の大人にもクラスメートにも下級生にまで、可愛がられたりイジメられたり（どっちも同じ意味）するのが、そんなにいやじゃなくなってる。性的快感てのをあたえられるのはもちろんだけど、痛いことやはずかしいことをされても、サチの身体で楽しんでるんだと思うと、胸がきゅうんとねじれて、頭がかすんでくる。

こういうのを、マゾヒズムとかエツ逆っていうんだっけ。この一年間で、ずいぶんとエッチな言葉を教えこまれた。サドマゾとかエツ逆とか、オマンコとかメコ穴とかケツマノコとか。女の子に付いてる小さなチンチンは、ほんとうはクリトリスっていうことも。だけど、ご主人の五郎様は今もコチンコと言ってるから、サチもそうしてる。でも、チンチンの皮をむいたらキトウが顔を出すのと同じで、コチンコも皮をむいたらピンク色の小さな中身が出てくるのは、区別してサネと呼んでいる。

サチが——今は、心の中で考えるときも、できるだけオレは使わないようにしてる。う

っかり口にしたら、大だんな様に厳しくしかられる。

それでお仕置をされるんだったら、わざと言うかもしれないけど。サチのことはお見通しだから、あまやかしてはくれない。

なんだっけ。そうそう。サチがエツ逆を受け入れちまったのは、どれいになってから二か月も経ったころだっけ。大だんな様のことを、サチたちの保護者だって信らいできるようになったのが大きいかもしれない。

その一番のきっかけは五月十四日——父ちゃんと母ちゃんの四十九日のことだった。

## 両親の位はい

あの日、サチは犬小屋のクサリをはずされて、首輪は着けたまだたったけど、大だんな様の許しをいただいて一か月ぶりに物置小屋へ入った。

正太と美知は、ろう屋とたいして変わらなかった小屋の中を、すみずみまでそう除をして学校から持ち帰った図画や古新聞で作った人形なんかをかざって、貧ぼう人の子供部屋くらいに仕立てていた。二組の布団はきちんとたたんで小屋のすみに片付け、ミカン箱の机も（二つでいいのに）三つきちんと並べられていた。両側の机には、教科書とかノートとか並んでいるけど、真ん中のは牛乳びんに差した古新聞の造花だけ。

「ふん、これは手回しの良いことだ」

大だんな様が机の上に真新しい位はいを置いた。

「あの……これは？」

「開けてみろ」

開ける……？

位はいを手にとって、前がとびらみたいになっているので、留金を外して開けてみた。ぼろっちい布切れが入ってる。



「これ……？」

なんとなく見覚えがあった。

「父ちゃんのシャツだ！」

正太がさげんだ。

「母ちゃんのスカートも！」

美知も大声を出した。

「遺骨は、そう方の親族が持ち去ってしまったが。それでは、あまりにおまえたちが不びんなのでな。海上保安庁で保管していた証こ品の一部をゆずり受けてやったのだ」

そして、大だんな様は位はいまで作ってくださった。

「ありがとうございます」

サチは位はいを胸にだきしめて、初めて心の底から大だんな様に感謝した。

「うむ。しかし、忘れるなよ。ワシだけでなく、家の者にもだ。逆らったら、こんな物は捨ててしまうからな」

うぐ……セッカン覚ごで逆らうこともできなくなっちまった。でも、命に係わるような無茶な命令はされないんだから、痛いのもはずかしいのも我まんすればいい。つまり、まるきりこれまで通りだ。

「はい、サチは大だんな様にもご主人様にもおく様にもお姉様にも、決してさからいません」

なんのわだかまりもなく、そう言えた。実際には、この後も位はいをおどしに使われたりはしなかった。サチは厳しいセッカンにもたえたけれど、同じことを正太や美知にするぞとおどかされたら、降参するしかないじゃないか。

## 正しい着け方

位はいをいただいた三日後だっけ。大だんな様のとりなしで、サチたちはおやしきのお風呂を使うことを許していただいた。サチにとっては、お風呂でご主人様に持て遊ばれる日々の復活でもあったし、大だんな様の背中も流すようになって、それは月に一度か二度だけど、必ず後でおく様とお姉様のコンビから厳しいセッカンを受けた。そして、セッカンでもオマンコをぬらすようになってたから、ますますおく様をおこらせて——竹尺を刀のヤイバみたいにしてオマンコをたたかれるだけでなく、首輪のクサリを鞭にしたり、立ち木にしばり付けて、乳首とコチンコのピアスから先の部分を洗たくバサミではさんだまま朝まで放っておかれたりもした。

お風呂を許していただいた最初の晩は、つらかった（けど、軽く行っちまった）。大だんな様とご主人様がいっしょに一番風呂を使って、サチは二人の背中を流すように命じられた。のは、おく様への建前で。サディストの父親から見習サディストの息子への教習だった。

「前から気になっておったが、おまえはピアスの着け方をまちがえているぞ」

この『おまえ』は、ご主人様とサチと、両方らしい。

大だんな様の命令で、サチはタイルゆかにあお向けにねて、五郎様にコチンコのピアスを外していただいた。新しく着けていただいているピアスは金属の輪っかが太いし、はしっこが球になっているので、外するのが難しい。しかも、コチンコを引っ張りながら輪っかを回すものだから、痛くてうめき声をおさえられなかった。

「包皮にまで穴を明けてしまっているが……まあ、なんとかなるだろう」

サチは自分の手でコチンコの皮をむいて、根元へおし下げた。サネに明いている穴に直接、ピアスが着けられた。先っぽのいちばんびん感なところがむき出しになって、ほんの

ちょっと息をふき付けられただけでも、ビクビクッとイナヅマが走る。

「ナイロンか絹のパンティをはかせてやると面白いのだから」

身体を動かすたびに、やわらかな生地が先さんにこすれて、大だんな様の言い方だと「行きっぱなし」になるんだそうだ。

「しかし、昭江をおこらせると、とぼっちりを食うのはサチだからなあ」

そんなに気持ち良いのなら体験してみたい。とぼっちりだってかんげいしてしまうんじゃないだろうか。竹尺をオマンコにたたきこまれたら、すごく痛くて泣いちゃうけど、いつまでもじんじんしてオマンコのおくまで熱くなる。

「まあ、そのうち工夫をしてやるか」

この工夫というのが実現するのは、サチの誕生日——来年になってからのことになる。でも、外を引き回されるとき風にふかれたりすると、もらしそうになるほど気持ち良いし、セックスのときに男子のお腹で（オトナにされるときにはジンジロ毛で）こすられたりするの素敵だから——そのためにパンティをはいてみたいとは思わなかった。もちろん、オマンコを丸出しで外を歩くなんで、ものすごくはずかしくて慣れることはなかったけど、これがサチのトレードマークだって気にはなってきた。はずかしくてぬらしながら歩くんじゃないと楽しくない——なんて、いつの間にか思うようにはなっていたかな。

## おだやかな日

五月の飛び石連休は、大だんな様たちはレジャーとかバカンスには行かず、家でのおんびりとくつろいだ。その分、サチは大だんな様にもご主人様にもおく様にもいじめて可愛がっていただいたけど。

新しいオモチャだって、最初は夢中になって遊ぶけど、だんだん他の遊びもするようになって、つまらないオモチャだったら、ずっとオモチャ箱の中に放りこみっぱなし。お気

に入りのオモチャだって、たまに遊ぶくらいになるよな。サチは、ご主人様のお気に入り  
のオモチャだったから——忘れられたりはしなかった。ご主人様は気前よくオモチャを友  
達に貸す人だから、サチで遊んでくださるのは週に二回か三回だった。毎日じゃなくなっ  
たから、身体も心も休まるようになった。

決してさみしくなんかなかったぞ。サチで遊ばないときも、犬を散歩させるのと同じで、  
外で遊ぶときには必ず連れて行ってくれた。客観的には引き回されたって言うべきだろう  
な。

たとえば、六月の最初の日曜日。ご主人様は本物そっくりで実際に飛ぶ模型飛行機を持  
ってるけど、久しぶりにこれを飛ばそうってなって。取り巻きやそうでないクラスメート  
にも声をかけて、原っぱで飛ばしっこをした。サチもご主人様のお供をした。

この日は首輪でクサリにつながれただけで、手もしばられなかったしヤジロベエにもさ  
れなかった。乳首とコチンコの名札ピアスだけで、なんだか物足りない気分になっちまっ  
たのは、我ながら不思議だったな。通学のときだけはくつをはかせてもらえるけど、今は  
はだし。なので、小石とかふんづけると痛いし、ぶつけるとつめをはがすから気をつけて  
歩いたけど。くつをはいていて、その心配がなかったら、はだかにばかり意識が集中し  
て、もっとはずかしかっただろう。

いつもはサチに荷物を持たせるご主人様だけど、模型飛行機にはさわらせてもらえな  
かった。

集まったのは、当然だけど男子ばかりが十数人。他の子も模型飛行機を持って来てたけ  
ど、みんなライトプレーン。竹ひごを曲げて紙をはったつばさと、細い木の棒のどう体。  
だが子屋で売ってるしょぼいものを持って来た子もいたぞ。それでも、プロペラを指で回し  
てゴムを巻いてから投げ上げると、何秒か（竹ひごを曲げた本格的なのは十秒以上）上し  
ょうしてからプロペラが止まって、空中をすべり降りてくる。

けど、ご主人様のはちがった。格好いいだけじゃない。つりに使うリールがあるだろ。  
糸巻みたいなのじゃなくて、手元のハンドルを回すと、どんどん糸をたぐりこむやつ。あ

れに似た器械の先っぽが『？』の形になってて、そこに模型飛行機のゴムをひっかけて、何倍にもものぼしてから何百回と巻いていくんだ。ゴムが二重三重のコブになる。

これを飛ばすと、何十秒もプロペラが回って、豆つぶみたいに小さく見えるまで上しようする。大きくせん回しながら、ゆっくりと風下へ飛んでく——のを、ワアワアはやし立てながら、みんなが飛行機の通りにぐるぐる回りながら追いかける。あ、ご主人様だけは風下へ向かってゆっくり歩いてたな。

サチはぼけっと見物してるだけ。退くつだしお日様はあったかいし風は気持ちいい。初夏の草っ原でね転がってた。だって、つつ立ってたら通りがかりの人にはだかを見られるし、コチンコに風が当たるとむずむずして自分でイタズラしたくなる。地面すれすれだと風もふかないから、安心だ。手をしばられてない自由をマンキツしたいから、大の字になってた。通りすがりの人には見られたくないんだけど、見てほしいって気持ちもあるから……お股を開いてると、だれかに見られやしないかってスリルがあった。

だけど、のんびりしてられたのは一時間と続かなかった。模型飛行機とサチとでは、サチのほうが新しいオモチャだ。

みんなが思い思いに自分のライトプレーンを飛ばすのにあきると、ひとかたまりになって、ご主人様のオモチャで遊び始めた。ご主人様のオモチャだったって、本物そっくりの模型飛行機じゃないほうだぞ。こっちはこわれやすい宝物だから、取り巻きにだってさわらせないんだ。そして、サチはこわれにくいし、宝物じゃなくてどれいだ。

「せっかくメス犬を連れて来たんだ。遊ばせてやろう」

ご主人様が言い出して、きっとエッチなことだと思うから、子分じゃなくても賛成するよな。

「これ、ちょっともったいなんだけどな」

そう言いながらご主人様に取り出したのは、模型飛行機の予備のゴム。はばが三ミリくらいある平べったいやつで、輪ゴムなんかとはケタちがいに強いってことは、すぐに分かった。

サチを四つんばいにさせて手を折り曲げ、二重にしたゴムで片方ずつぐるぐるしばった。引きのばしながら巻き付けられると、縄でしばられるよりもきつい。びくとも動かない。足も折り曲げて同じようにしばる。四つんばいは四つんばいでも、前足が二の腕だけになるから、前へつんのめりそうになる。すねが地面に着いていれば、身体を後ろへ引いて身体を起こせるけど、これだと出来ない。なのに。

「よし、チンチンをしてみろ」

だから、出来ないんだってば——てのは、聞いてもらえないから。

えいっ……手をつつ張ってお尻を後ろへ引いて、反動をつけて身体を起こした。ら、やっぱ無理で。あとちょっとってとこでふん張れなくて、ドサッとたおれた。

「……！」

ひじから小指まで電気が走った。気持ち良いときの電激とかイナヅマじゃなくて、神経がピリピリするやつ。

「運チなやつだな」

ご主人様がサチのおさげを引っ張って、身体を起こしてくれた。

あ、一週間ほど前から、サチはかみを二筋の三つ編みにしてる。大だんな様の命令。半ズボンで男子もどきだったころは、母さんの言いつけでかみをのばしてはいても、お下げだけは断固きょ否してたんだけど。今は別の理由でお下げがきらいだ。というのは、思い切り手をねじ上げて、お下げでしばるなんて無茶をされるから。顔が上向いちまうから、ひざまずくとオチンポをおねだりしてるみたいで……胸ドキドキでオマンコじんわり。だから、きらいなんだよ。ほんとだぞ。

正座した形になって、両手を前につき出したけど、我ながら犬のチンチンとは似ていないと思う。しょうがないから、口を半開きにして舌を出して。

「へっ、へっ、へっ……」

サービス精神王盛だなあ。でも、ご主人様もみんなも、ちっとも喜んでくれない。ズボンの前もふくらまさない。いつもサチに、痛いことやはずかしいことをさせてるから、こ

んなのって気のぬけたサイダーだよな。

「よし……マンマン」

え？ マンマン？

そんなの、聞いたこともない。ていうか、オチンポがチンチンで、オマンコはマンマンだけど。

しょうがないから、ひざ立ちは出来なかったので、座ったまま足をうんと開いて、腰をカクカクふってみた。

やっぱり、ご主人様は面白くなさそう。

「こいつ、メス犬失格だ。そうだ、ポニーガールにするぞ」

わけ分かんないことを言い出した。どうせ、SMキタンって本の受け売りだろう。

ポニーてのは、子馬のこと。女の子を馬に見立てて、馬だから当然はだかで、いろんな装具を着けさせて、馬車を引かせたり人を乗せて走らせるんだと、ご主人様が得意満面でみんなに説明する。

だけど、変だな。カウボーイてのは牛飼いのことだぞ。ボーイとガールで立場が反対になるのかな。

ご主人様は、サチから首輪を外した。馬が首輪をしてちゃおかしいものな。サチを四つんばいにもどして、背中に乗ったんだけど。ご主人様の足が地面に着いちゃう。折り曲げても、ご主人様はサチより背が高いから、ひざ立ちにしかない。

足を前へのばしてみたり、お尻の上までずれてみたりして——足を内側へ曲げて、ふくらはぎでサチのおっぱい（ささやかだけど、ふくらみ始めてるぞ）をおしつぶす形にしやがった。名札のピアスがこねくられて、痛気持ち良いのは、がまんするけど。馬だからってんで、お下げを手づながわりに引っ張るのは、やめてほしい。

「ハイヨー」

ぺちんとお尻をたたかれて、しょうがないから遊びに付き合ってた。自分より重たいご主人様を乗せて、ふつうに四つんばいで歩くんだって、難しいんだぞ。なのに、手足

を折りたたまれて、二の腕と太腿だけで歩かなきゃならない。

他の子たちが、おとなしく見物するわきゃない。模型飛行機を追いかけるみたいに、サチのまわりをぐるぐる回りながら、ついて来る。

「馬のくせに、人間よりおそいや」

からかわれて、カチンとくるのはご主人様。とぼっちりを食らうのはサチ。

子分に首輪を持ってこさせて。

「ハイヨー」

ギャデン！

クサリでお尻をたたいた。でも、不自然な体勢だし、ご主人様の手はサチのお尻のすぐ近くでクサリをふり回せないから——ナワトビよりも痛くなかった。

ご主人様の面目をつぶしたくなかったから、がんばってスピードを上げようとしたら。つんのめって転びかけて、ご主人様をふり落としちゃった。

「こんなジャジャ馬に乗ってられるか。ロデオ大会に変こうだ」

こりないんだね。

選手の一番手はよりによって、取り巻きの中でいちばん体格の良い中村友也くん。サチをまたいで、どすんと腰を落としやがった。

「ぐえっ……」

つぶされたカエルみたいな声を出しちゃった。

仕返しをしてやれ——という気持ちよりも。ご主人様をふり落としちゃったんだから、子分もみんなふり落とさないと、やっぱりご主人様の面子が立たないよな。

だから、思い切り反動をつけてサオ立ちになってやった。けど、手応え（この場合は腰応え？）が無かった。それもそのはず。地面に足を着けて、立ち上がってやんの。

「反則だろ」

「ちゃんと乗ってろよ」

ご主人様が判定を下すより先から非難ゴーゴー。で、やり直し。



サチはまたサオ立ちになると予想したんだろう。身体を起こせるならやってみろとばかりに、友也くんは肩ぎりぎりに腰を落として。お下げはつかまなかった。ので、両手を前へ投げ出してお尻をはね上げてやったら。自分の目方で転げ落ちちまった。

ご主人様は、大喜び。別に、オマンコポンポンとかはしてくれなかった。

オマンコポンポンてのは、ふつうの感覚だと頭ナデナデかな。大だんな様がときどきしてくださってるのを見て、ご主人様も真似しだした。オマンコポンポンでもほめ足りないってときは、中指をメコ穴につきさしてくださる。

だっ線しちった。

サチは本気で暴れて、全員をふり落としてやった。おかげで、ひじもひざもすり傷だらけ。お屋しきへもどってから、ご主人様がヨーチンで手当てしてくれた。傷に染みて一年生だったら泣くだろうけど、サチは六年生だし、乳首やコチンコやオマンコにも何度かぬられてたから、もちろん泣かなかった。

そうそう。五郎様はサチよりも八か月早く誕生日をむかえた。万国博もお年玉も要らないって約束でサチをどれいにしたんだけど、誕生日のプレゼントは、しっかりもらってた。なんと、英語で書かれた全三十五巻の百科事典だそう。見せてもらえなかったけど、さし絵がすごくきれいで、なんて書いてあるか自発的に英語を勉強するように……なるはずがないだろ。大だんな様も息子のことは分かてるから、大学生の家庭教師がオマケにくつついてた。

この人は山の向こうから来る人なので、サチを見せびらかしちゃうずいと、ご主人様も考えたんだろう。家庭教師が来るときは、サチは犬小屋、正太と美知は物置小屋から絶対に出るなと言いつけられた。

大学生は、若い大人だよな。オトナの人のセックスで、サチは大だんな様しか知らないし、それもお尻だけ。興味はあったけど、さすがに大だんな様とご主人様とおく様の三段重ねの厳命を破ってみる無鉄ぼうは包しんだ。

——オトナの人がガキに対してどんなセックスをするかは、秋祭りのときにイヤってほど知らされた。

## 雨の日も全ら

全らでの生活にも慣れちまって、登下校中に顔見知り（向こうに言わせればオマンコ見知りだな）の大人とすれちがったくらいじゃ、胸に波風すら立たなくなってきた。港まで引き回されて、なじみの小父さん小母さんから同情の目で見つめられるのは、オマンコはかわいたまま胸がチクチクするけど——大だんな様の会社で何をされるか、そっちを期待なんかしないでおびえている。ということにしておく。

そんなふうには心は慣らされてったけれど、身体のほうは慣れないままだった。季節の変わり目ごとに、それを思い知らされる。その最初が梅雨だった。

梅雨になっても、ヤジロベエは続いていた。背中にわたした竹ザオに両手を広げてしばらく付けられ、左右に二個ずつランドセルをつり下げられるやつ。

ランドセルはぬらしちゃいけないからビニールシートで包むんだけど、サチはぬらしてもかまわない。せめて、カサを背中にくくり付けてくれよ。びちょぬれになって、強い風にふかれたりしたら、夏が目の前だっていうのに、こごえ死にそうになるほど寒い。

学校に着いて、げた箱の所で身体をふくと、もっとみじめになるけど、人心地は取りもどせる。というのも、タオルなんかどこにも無いから、備え付けのゾウキンで身体をふかなくちゃならない。ぬれた足をふくためのゾウキンだぞ。学校の全員から足の裏をぺたぺたおしつけられてる気分だ。

ご主人様は、さっさと教室へ行っちゃってるから、ものすごく心細いはずかしい。これは大だんな様の命令でしてることだって、思って。それでも足りないから、ほとんどぬれてないオマンコの中までゾウキンをねじこんで、ちょびっとだけ身体を温めたりする。

登校よりは下校がづらい。お屋しきへの坂道のとちゅうにくぼ地がある。日当たりが悪いのと土の性質かな。あまり草がはえてない。ふだんはどうってこともないけど、雨が續くとまわりから水が流れこんで、どろぬまになる。雨が上がっているかカサも要らない小降りときは、ここでどろんこ遊びをさせられる。

そのかわりヤジロベエをおしまいしてくれるから、雨ですべりやすくなってる坂道を重い荷物を持たされずに両手でバランスも取れるから——苦あれば楽ありだ。一難去ってまた一難のほうに当たってるけど。

だいたいのは的当てオニだな。デパートの屋上とかにあるやつ。オニの人形の腹に的が書いてあって、投げたボールが命中すると「ウウー」とうなって、目玉の電球が光る。そのオニがサチで、ボールはどろ団子。おへそに当たれば「ガオオ」ってさけぶ。

石入れは禁止だから、安心して顔をねらってくるガキもいる。ご主人様はガキじゃないから、ピアスねらい。痛いたって高が知れてるから、当たっても小さなうめき声くらいでこらえる。

最初は両手を広げて両足をふん張ったポーズ。オニというかロボットだな。そのうち、エッチなポーズを命令される。ラヂオ体操の上体反らしみたいなのとかブリッジとか。そうなるのはオマンコになる。命中するだけじゃダメで、どろ玉が中まで入って金的になる。金的ってキンタマの意味もあるから、ポーズを取りながらくすくす笑っちゃうこともある。金的に命中したら、「ガオオ」じゃなくて「アッハーン♡」だ。でも、さすがに本当に痛いので。

「きゃあっ……アッハーン」て、なっちまう。

ご主人様もふくめて、サチが痛いのをこらえて演技してるんだと思ってるみたいだけど。サチは、ナワトビや竹尺でメコ筋をたたかれても、「きゃああっ……あああんん」とか「ひいいっ……い、いいい」になっちまうんだから。ぬるっとした固まりがメコ穴にごう速球でたたきこまれるのは、ほんとうに気持ち良いんだ。

でも、内しよにしとく。そんなことがご主人様に知れたら、どんな無茶をされるかわか

ったもんじゃない。されてみたいって、思わないこともないこともあるかもしれないような気がしないでもないけど。

うん。大だんな様には、わりと早くから見ぬかれてたと思う。でも、サチは五郎様のオモチャだし、大人がガキで遊ぶのは社会的に良くないことだから、あんまりサチを喜ばしてはくれなかったな。

その他のどろ遊びは、シンクロナイズどろスイミングのソロ演技とか、カエルごっこやカップごっこ。ほんとは、ご主人様も取り巻き連も、はだかになってどろまみれになりたかったんじゃないかな。サチがどろの中を転げ回るのをうらやましそうに見てたんだから。

どろぬまに入らなくても、服もくつもよごれるから、遊びが終わったら解散。サチは自分のランドセルを――背負うとよごれるから手にぶらさげて、ご主人様の後についてくだけ。

でも、お屋しきへ帰ってからがめんどうだ。チョお姉様にお願いして、大きなバケツに何ばいも水をもらって、どろだらけの身体を洗わなくちゃならない。オマンコの中のどろを指でかき出すのは、みじめだけど気持ち良い。

身体がきれいになったら、犬小屋で休んで。学校で習ったことを空で思い出して復習。雨もりがするから教科書を広げられないし、ノートもえん筆も新しいのを買ってもらえないから、弟と妹にゆずってやった。サチは授業中に書き取りや筆算をしなくても、しかられないものな。

正太と美知には、きちんと勉強して将来は独立してほしい。

なのに、姉の心弟妹知らずだよ。雨にぬれるお姉ちゃんがawaiiそうだからって、自分たちもはだかになって犬小屋でいっしょにねようとする。

鼻のおくがきなくさくなったけど、心をオニにしてしかりつけた。

「お姉ちゃんは、どれいごっこやはだかんぼうが大好きな、変態になっちゃったんだ。おまえたちは、こんなふうになっちゃダメだ。きちんと服を着て、しっかり勉強して、父さんと母さんを悲しませないようにしろ」

オレは、心にも無いことは何ひとつ言っていない。変態のマゾになっちまったのも事実だ。でも、受け取り方はそれぞれだ。ふたりは鼻をすすり上げながら、小屋へもどって行った。

## 弟妹の身代り

オレの願いが届くのは正太と美知だけで、他のやつらから見れば、二人も山持家の世話になってることに変わりはない。姉が山持家のどれいなら、そのきょうだいもどれいだろう。まだ使えないから飼育殺しにされてるんだろう。そう感ぐるのが当然だ。

それをイヤってほど思い知らされたのも、梅雨に降りこめられた日だった。

その日はすごい土砂降りで、次の校内放送があるまで下校を見合わせるってことになった。男子は外で遊ぶのが好きなのに、それが出来ない。退くつだけど、手元には絶好のオモチャがある。学校の中だと、相当な無茶をしても（救急車を呼ぶほどでもない限りは）おとがめ無し。

なので、久しぶりに『校内引回しの刑』ごっこをしようってご主人様と取り巻き連とが衆議一決しちまった。もちろん、主役のサチの意見なんか聞いてもらえない。

SMの雑誌は父親公認になったから、ずいぶん勉強したんだろうな。後ろ手にしばって首輪のクサリで引き回すなんて生易しいもんじゃなくなってた。

「浩二、ビリビリブザーてのを作ってたな。あれを二つ持って来いよ。それとリード線を二十メートルくらい」

ご主人様が、目をきらきらさせながら、安西浩二くんに命令した。元々は取り巻きってほどでもなかったのに、サチで遊べるからタイコを持つようになった。

「ダメだよ。部活の備品は、勝手に持ち出せない」

「オレが借りたいって、モーターに言えよ」

モーターというのは、門田勝幸先生こと。科学部のご間にぴったりのあだ名だ。

浩二くんが理科室へ行ってるあいだに、ご主人様は取り巻き連に命じて十字かみみたいな物を作らせた。

黒板用の大コンパス。ツマミのある「人」の字形じゃなくて足の長さが同じ「へ」の字形をしてるから、支点のチョウネジを外すと、頭が半円形をした四角い棒になる。頭から三十センチくらいのところへ、片手ホウキを直角にくくりつける。

「アシを開けよ」

うう……この命令だけで、何をされるか分かっちゃう。けど、コンパスの足は一辺が四センチの正方形だぞ。対角線の長さだと五センチ半だっけ。大だんな様のオチンポだって、そんなに太くない。

それを無理矢理にでもつつこまれると……思うだけで、コチンコが固くすくみ上がって、オマンコがじんじん熱くなってくる。

「ぎいゝゝゝ……痛いゝゝゝ！」

悲鳴を上げたけど、ズブズブッとおしこまれちゃった。正方形の角でオマンコを切りさかれるようなすどい痛みと……オマンコが破れつしそうなにぶい圧ぱく感。

水平になってるホウキのえは、足を開いたポーズで、ひざの裏にしばり付けられた。仁王立ちのまま、びくとも動けない。いや、動こうと思えば動けるけど。オマンコを内側からえぐられて、にぶい痛みが走る。

そこへ浩二くんがもどって来た。小さな板の上に組み立てたブザーが二つ。五年の理科の授業で作ったやつより、ずっと本格ばい。「ロ」の字形の鉄板にエナメル線を巻いた部品は変圧器みたいだけど、かん電池は直流だぞ？

ブザーには、それぞれ二つの単子がある。そこに長いリード線が取り付けられて——線のはしが、ピアスのリングに巻き付けられた。乳首のピアスに一本ずつと、コチンコには二本。

「サチは、これからリモコン操縦のロボットだ」

ご主人様がブザーのスイッチをおした。

びいゝゝゝゝゝ……

「きゃあっ！ つううう……！」

二段構えのショックだった。

乳首とコチンコに電激が走ったのが「きゃあっ！」

コチンコをいじられたときの快感の電激とか、ひじをぶつけたときの比喩表現じゃない。

本物の電気ショックだ。百ボルトだと死んだりするから、何十ボルトってとこか。内側から無数の針でえぐられるような、これまでに感じたことのないショックだった。

反射的に胸とお股をかばってしゃがみこもうとして、大コンパスがゆかにぶつかってお股のおくをつき上げられた激痛が、後半の「つううう……！」だ。

「大げさだなあ。びっくりはするけど、女子部員だって、そんな大きな悲鳴は上げなかったのに」

浩二くんが笑ってる。

科学部での実験だろ。指でさわったとかに決まってる。他の部分の何十倍もびん感な乳首やコチンコに通電したはずがない。くそ、オチンポに通電してみろ。泣きさけぶほうに一万ガバスだってかけてやる。

「今のは左へ回れって意味だ。右だけなら右せん回だぞ。そして両側なら前進だ」

びいゝゝゝゝゝ……

びいゝゝゝゝゝ……

「きゃあゝあゝ……！」

両方の乳首とコチンコ。コチンコは、さっきの倍くらい強いショックだった。両手でお股をかばって……しゃがみこむのだけは、ぎりぎりでこらえた。

「手がじゃまだな。だれか、糸を持ってないか——女子は？」

裁法は女の子のたしなみだし、ボタンが千切れたら男子みたいに平然とはしてられないから、高学年の子なら、針と糸は常備してる。例外は（今だけでなく、ずっと前から）サチくらいかな。

だけど、女の子を（どうやってかは分からないけど）いじめる手助けをするはずが……あった。

「これで、いいかしら。何をするのか、見せてね」

久保田聡子ちゃんが、糸巻ごとご主人様に手わたした。

聡子ちゃんは、サチが教室でいじめられてると、男子もサチもひとまとめに追い出そうとする。助けてくれるとかじゃなくて、見るのも聞くのもけがらわしいって感じだった。だから、男子に加担したのは意外だった。

ご主人様は乳首とコチンコの根元に糸を巻き付けた。ピアスよりおくだから、すっぽぬける心配は絶対に無い——のが、ち命的だと、すぐに思い知らされた。

サチの腕を蒸気機関車のピストンみたいに曲げさせて、コチンコからのばした糸の両はしを左右の手首に結びつけた。そして、右の乳首から垂れた糸は右手首、左は左に結んで——サチは、手を上にも下にも動かせなくなった。

「テストだ」

びいびいびいびい……

「ぎゃっ……！」

電激を予測してても悲鳴をこらえられない。それよりも痛いのは、反射的に手でかばおうとして、乳首とコチンコを思い切り引っ張ってしまう。眼の前が真っ赤に染まって黄色い星が飛び散るような激痛に、自分で引き千切る寸前で手の動きが止まった。

「よーし。それじゃ、前へー進め！」

びいびいびいびい……

びいびいびいびい……

左右の乳首とコチンコに電激を食らって、歩けるはずが……あった。

「陽太、コチンコの名札を引っ張ってやれ」

陽太くんも、サチが目当てで腰ギンチャクになった一人だ。もう精液が出るからセックスは禁止で、フェラチオとケツマンコしかさせてもらえない、かわいそうな……ことなん



か、あるもんか。

ほんとうにコチンコを引き千切れそうなくらい引っ張られて、サチはよたよたと歩き出した。

電激は続いているし、一步ごとにオマンコをこねくられて……ものすごく痛いけど、腰のおくでよう岩がにえたぎる。十歩も歩かないうちに、陽太くんを追いついてぶつかりそうになった。

後は自発的に歩き続ける。だんだん大股になっていく。頭にピンク色のかすみがかかって、足は雲をふみ始める。

「こら、止まれ！」

ぐっと肩を引きもどされて、電激が切れたらストップの合図だと思い出した。

「くそ……これでエツ逆されるんだったら、バツのあたえようが……そうだ。またリモコンに逆らったら、この遊びはやめるぞ」

ふつうとは正反対のおどしだよ。それはご主人様も分かっている「何かちがうんだよな」って顔をしてる。

とにかく、リモコンロボットごっこを再開。サチは、大股にならないように気をつけながら、物足りなさをがまんして、ろう下を進んでいった。階段を下りて。雨が降っている外へは出ずに、先生がそっぽを向いている教員室を通り過ぎて、低学年の教室へと向かわされた。

低学年の教室にも担任の先生の姿がなかった。生徒の家へ連らくしたり、雨がやまないときは集団で下校する準備とかで大いそがしだ。

「パンツもぬがしちゃえよ」

物そうな声が聞こえた。窓から教室の中をのぞくと――男子と女子がひとりずつ、パンツ一枚でクラスメート（だろう）に取り囲まれていた。

「どれいの妹もどれいいに決まってるだろ。ご主人様の命れいだ。パンツをぬげよ」

「みっちゃん、どれいじゃないもん……」

べそをかきながら言い返しているのは美知だった。となりの男子は正太。

ああ、オレのせいだ。オレが五郎様のどれいになって、はだかで登下校していじめられてるから……考えてみりゃ、そうだよな。親がドロボウとかして警察につかまったら、その子は良くてツマハジキ、たいていは寄ってたかっていじめられる。先生だって、子供に罪はありませんとかきれいごとのお説教はするけど、家庭かん境が良くないとか職員室で悪口を言ってるもんな。

だけど。オレがぎせいになって正太と美知を守るって決心が、無意味になっちまう。

「ご主人様」

まだ両方に通電されてたけど、サチは立ち止まってご主人様にうったえた。

「あれ、やめさせてください。あの子たちも、ご主人様の言うことなら聞いてくれます」

山持家のおぼっちゃまに逆らったら、この町に住めなくなる。本人は理解してなくても、親から言いふくめられてるはずだ。サチをこんな目にあわせてる権力を利用するのはくやしいけど、どれいとその家族を（家ちくやペットと同じように）守ってくれるのは、ご主人様の務めだぞ。

ご主人様が考えこんだ。そのあいだにも、正太と美知はおさえつけられてパンツをぬがされちまった。正太は三年で美知は二年だけど、ふたりをいじめてる連中は、三年と四年が多い。正太には女子が、美知には男子がむらがってる。

「やだよ……パンツ、返してよ」

「美知をいじめるな。大ぜいでひきょうだぞ。ボクと勝負しろ。上級生だろ。ボクがこわいのか」

正太が妹をかばう健気な姿に心打たれた——わけでもないだろうけど。ご主人様が、わざと大きな音を立てて教室の戸を開けた。

いじめっ子たちが、ぎくっとふり向く。

「おまえら。なんの権利があって、オレのどれいをいじめてるんだ？」

「それ……」

ちがうって言おうとしたけど、後ろ手にふりはらわれて、ぐう然の乳ビンタ。

「あんっ……」なんてあえいでる場合じゃない。

「お前らの親父もおふくろも、山持家のどれいみたいなもんだぞ。じゃあ、お前らもオレのどれいじゃないか。どれいがどれいをいじめて良いのかよ」

無茶苦茶な理くつだけど、それだけに言い返せないでいる。

「でも、そのお姉さんは、みんなでいじめてるでしょ」

この子たちがどれいなら、ご主人様の取り巻きもどれいってことになるから、どれいがどれいをいじめてるじゃないか——そう言いたいんだろう。かしこい子だな。

「サチだけは、どれいより身分が低い性どれいだ。だから、他のやつもサチをいじめてかまわないんだよ」

はたで聞いてても、むじゅんがある。この子たちの言い分だと、性どれいのきょうだいも性どれいってことになるから、いじめて良い——そこに気づくのはオカメ八目ってやつかな。

実際のところ、山持家のおぼっちゃんというより最上級生から頭ごなしにしかりつけられて、すっかり縮こまってる。ところへ、正太と美知なんか眼中になくなる決定的なひと言。

「オレの性どれいを貸してやる。好きなだけいじめて良いぞ」

有言実行。子分たちに手伝わせて、ビリビリリモコンと糸を外して、お股の十字かも（こねくりながら）ぬき取って。

「ほら……」

サチを教室の中へつき飛ばした。

これで、サチひとりがぎせいになれば済む。

「正太、美知。六年の教室で待ってろ」

とにかく、ここからはなれた所だ。とっさの思いつきだったけど、結果的には名案だったかな。

「道夫、雄介。二人を連れて行け。オレのランドセルにあるおかしを食べさせてやれ。分かってるだろうが、そいつらはサチとちがうからな」

そんなクギを差さなくても、六年生が二年生をいじめたりは……するかもしれないけど、こいつらはしないと思うぞ。サチを使わせてもらえなくなるもんな。

チビどもの前につき出されて。サチもチビどももとまどっている。ご主人様が、うまくけしかけてくれるかな。とりあえず、前をかくしたりせずに、ゆるく『気をつけ』の姿勢で待つ。

「なにをしたって、いいんだぞ。さっきの二人は、はだかにした後、何をするつもりだったんだ？」

チビどもが顔を見合わせた。ふつうは、パンツまでぬがせるってのが、いちばん激しいイジメだよな。された方は泣き出したり、はずかしい所をかくそうとしたり。それをおさえつけてチンチンやマンマンを見るくらいだろう。すっぱだかで、こんなにあっけらかんとされちゃ、やりにくいだろうな。

それでも。四年生の名札を着けた山岩って男の子が、一同代表みたいに気負ってサチの前へ進み出て。

「えいっ」

ぼすんとお腹をなぐった。

六年男子のパンチに比べたら、くすぐったくらい——てのは、さすがに言い過ぎだけど。腹筋を固めてたから、グウの音も出ない。言葉の使い方をまちがってる気もするけど。

「ガオオオオ！」

サービスのつもりだったのに。山岩くんは尻もちをついちやった。

「だいじょうぶだぞ。サチは、絶対にやり返さない。どんどんなぐってやれ。け飛ばしてもいいぞ——サチ、ひざを着け」

チビどもがなぐったりけったりしやすいように、低くなれってことだな。

手持ちぶさただったので、どうしようかと迷ったけど、両手は頭の後ろで組んだ。いか

にも無ていこうのポーズ。

サチを見下ろす形になると、チビどもは急に積極的になった。

男子ばかりが列を作って、一人ずつ順番に数発ずつ。両手を上げてわきがノーガードになったので、キックボクシングの真似をして、わき腹に回しげりを入れる子もいた。そのかわり、顔をなぐりに来る子はいなかった。ビンタは何発か食らったけど。

不思議なことに、二年の子と四年の子で、パンチもキックもい力がそんなにちがわない。余ゆうを持って「ガオガオ」やってくれる。

いじめられてるって感じはしなくて、遊んであげてる気分。

男子十人ほどがひとめぐりするうちに、い力がちがわない理由が分かってきた。低学年の子は何も考えずに全力だけど、少しは分別が働くようになってくると、人に危害を加えてるって理解して、無意識だろうけど手加減してしまうんだ。

そこへいくと、おく様はおそろしいよな。手加減無しに、竹尺をメコ筋に打ちこむんだもの。それとも、女だからかな。柱時計のゼンマイをねじ切るのは女だって聞いたことがある。非力だと自覚してるから、こん身の力をふりしぼるんだそうだ。

女の子と男の子で、関心の向く方向がまったくちがうってのは、実感した。男子がひと通り終わって、次は女子の番ってなったとき。

女の子が真っ先にねらったのはピアスだった。名札の部分の直方体を引っ張ったり、輪っかを回してみたり。上目使いにサチの反応を探ってる。

「うわあ、ここって、こんなふうに……わたしのもの、そうかな？」

ここってのは、コチンコのこと。

「サチは、ピアスでし激されて大きくなったけど、女の子ならだれにだってあるよ。だから、あっ……くうう、強く引っ張ったら痛いよ」

気持ち良いってのは、言わないでおいた。コチンコをいじっていると、たいてい親にしかられるらしいから。男子にはからかわれるだろうし、公園とかでこっそり遊んでたら、悪い大人にひどいことをされる危険もある。ひどいことだって、サチが毎日のようにされ

ていることに比べたら、ちっともひどくないけどな。

「サチ。オマンコがもっと見えやすいようにしてやれよ」

ご主人様もサチと同じように、大だんな様の訓答を受けて、オマンコとかメコ穴とか言うようになってる。コチンコって言い続けてるのは、サチのせいかな——は、とにかく。

どうすれば、もっと良く見せてあげられるかなと考えて。机を向かい合わせにしたのを三つならべた。自分のカイボウ台を自分で作るのは、みょうな気分だ。机の上にあお向けにねて。こういうときは、はりつけにされるポーズが似合ってると思うので、女だてらに大の字になって、ついでにひざを立てて——こういうのを、ご開帳っていうんだっけ。

七八人いた女の子が、いっせいに群がってきた。最初はひとりずつ、おそろおそろ。すぐに三組に分かれて、両方の乳首とコチンコのピアスをいじり始めた。

ピアスをそっと引っ張られたり回されたりしても、サチは無言で無反応。これが気持ち良いつて教えてあげるのは——真似をする子が出るかもしれないので、やめておいた。そして強く引っ張られたときは「痛い痛い、やめて」ってウソ泣き。ほんとは、胸がきゅうんで、お股のおくが熱くなったけど。

そのうちに男の子もピアスに興味を持って。女の子とちがって、自分には無い部分に関心が集中していく。つまり、オマンコとメコ穴。

穴があったら、何かつつこんでみたいってのは、人間の本能だと思う。そこに、オスの本能も加わって。最初はえん筆一本とかだったけど。

「そこは、チンポコをつっこむ穴だ。サチは直径五センチのハンドルだって入れられるぞ」

ご主人様が、とんでもないことを教える。直径五センチてのは、こわれたホッピングのこと。横につき出たグリップが無くなってたから、縦のハンドルをオマンコにつっこんで、ジャンプさせようとした。もちろん失敗で、すごく痛かった——のは、もう二か月も昔の話だ。地ごくの二か月間……とも言い切れなくなってるのが、自分でもこわい。エツ逆にどんどん染まっていく。

さいわい、直径五センチの品物は教室になかったし、自分のリコーダーをビビンチョな

ところへつつこんだりしたらエンガチョでカギ閉められるのは分かり切ってるから——チョークを何本入れられるか調べようってなっちまった。

けっこう気持ち良かったぞ。あんまりぬれてなかったし、チョークは水分を吸収するから。二本目からは、キシキシこすれ合う。それがメコ穴のふちにひびいて、ささやかだけど新しい感覚だった。

男の子たちは、すごく真けんな眼差し。女の子をいじめてるんじゃないくて、理科の実験でよう液の色が変わったりするのを自分の手と目で確かめてるのと同じ感覚なのかな。でも、実験とはちがって、どんどんエスカレートする。

「こいつ、ケツの穴にだってオトナの大きくなったチンポがはいるんだぞ。チョークだったら、何本いけるかな」

ご主人様にそそのかされたら、すぐ実験に取りかかる。もう、予備のチョークも使い果たしてるので、となりの教室まで取りに行く熱心さ。ついでに、新規の参加者まで連れて来る。

ほんと、びっくりするくらいに入ったぞ。最初の四本は穴のふちをこすったけど。五本目からは、束になってるチョークの中心へおしこんでいく。

こっちの感覚としては、ちょっとずつ穴を広げられていく感じしかない。痛みも少ししか増えない。ふと気がつくと、今にもさけてしまいそうなすごい痛みになっている。

でも、胸が苦しくなったり腰のおくが熱くなったりはしない。

ご主人様も、いつものサチを見つめる目じゃない。下級生たちと同じに（ギラギラじゃなくて）きらきらしてる。ズボンの前も、ぺちゃんこ。そうだよ。模型飛行機を飛ばしつつして、オレのがいちばん格好良いし遠くまで飛ぶなんて自まんしてるのがお似合いの年ごろなんだよな——なんて、サチのほうが（来年の一月までは）ひとつ下なのに、お姉さんぶったことを考えるのは、大だんな様にもいじめて可愛がっていただいてるから、おとなびちゃったのかな。

もちろん、今だからこんなふうに見えるってのは、分かってるさ。ご主人様が本気でサ

チをエッチでサドにあつかうときは、絶対の支配者でセイサツヨダツで……でも、サチのご主人様だ。いじめて可愛がってほしい……なんて、絶対に言わないぞ。

となりの教室から追加したチョークも無くなったところで、男の子たちの興味もうすれたみたい。

ご主人様も、サチがちっともいやがらないし善がらないしで、つまらなかったみたい。「これからも、オレの性どれいで遊びたくなったら、六年の教室まで来いよ。貸してやるぞ」

ビリビリリモコンを付け直す手間も省いて、ついでにチョークをぬく手間も省くどころか。

「一本落とすたんびに、教室でコチピン五発だからな」

いつもの分囲気にもどそうとしての無理難題だと思う。だって、どんなに閉めつけたって、チョークに囲まれてる中央のチョークは、まさつ力が小さいから、立って歩いたら、すっぽぬけちゃう。

結局、コチピン二十発の大番ふるまい。

コチピンてのは、コチンコへのデコピンのこと。二か月前は厳しいごう問だったけど、竹尺やナワトビでさんざんきたえられた今じゃ、ウォームアップみたいなもんだ。悲鳴は上げるけど、可愛らしく聞こえるように努力する余ゆうがある。

ご主人様も退くつだったと思うぞ。ビリビリリモコンや十字かくしざしに比べたら、コップに入れて三日間くらい日なたに置いたサイダーだもんな。生ぬるくて気がぬけてる。

——なんかリュウ頭ダビみたいな終わり方で、こんなので二人へのイジメが無くなるんかなと不安だったけど。ピタリと止まった。

二人に問い質したら——心配をかけたくないし、お姉ちゃんはもっとひどい目に合っているんだからとだまっていたけど、飛び石連休のしばらく後から、だんだんとイジメは始まったそうさ。気づいてやれなかったのは、オレが意図的に二人を遠ざけていたせいだ。ごめんな。



最初は言葉でからわれるくらいだったけど、だんだんと上級生をお手本にして、スカートをめくられたりズボンをめがされたりするようになって、全部めがされたのは、正太は今日が初めてだったけど、美知は三回目だそうだ。えん筆をつっこまれたりはされなかったのが、せめてもの救いだ。

他にも、給食の量を減らされたり、逆に牛乳がきれいな子からは『貧ぼうどれいへのおめぐみ』がしこたまだったり。無理に飲ませといて、休けい時間も机を取り囲んで便所へ行かせないなんてのもあった。美知は、何度かおもらしをしちまったそうだ。

教科書やノートに落書きをされたこともあった。物をそ末にしちやいけませんって親から厳しくしつけられてるから、破いたり捨てたりするやつがいなかったのが、せめてものなぐさめかな。

そんなしつこいイジメが、ピタリと止まったんだ。

翌日には二年から四年までのクラスで、担任の先生が『分相応』とかいう高学年でも難しい言葉を使って、みんな仲良くしなくちゃいけないとかお説教があったと、正太が言っていた。

二人へのいじめに関わったクラスだけ、しかも同じ日に。ぐう然じゃないな。ご主人様が大だんな様をお願いをして、大だんな様はPTA会長だから校長先生あたりに何か言っただんだと、サチは推理するぞ。

親の七光りを借りてだけど、サチの願いを（その場限りじゃなく）かなえてくれたんだから、五郎様をすこし見直した。

そして、大だんな様はたくさん見直した。この一件ではなくて、ちょっと後のこと。

正太の誕生日に、大きなケーキを丸ごとプレゼントしてくれたんだ。サチもクサリを外してもらって、小屋できょうだい三人でお祝いが出来た。しかも、新しいノートやえん筆とかも、美知が使う分までいただいた。これで感謝しなけりゃ、人間じゃないよな。

## ワイセツ対策

大だんな様はサチには（お尻にオチンポの他は）何もくだされなかったけど、ご主人様からはいただいた。

この一か月ほどで、急にサチの身体が女っぽくなって来たことは話したっけ。かろうじてだけとおっぱいって言えるくらいに胸がふくらんでお尻も丸みを帯びてきて、手足もふっくらしてきたかな。ご飯はお屋しきの人たちの食べ残しばかりだったし、量もお腹いっぱいには程遠かったけど、元がふつうの家の食事より栄養満点なせいかもしれない。

身体が女っぽくなったら、それだけ大だんな様にもご主人様にも楽しんでいただけるから、サチだってうれしいんだけど。コチンコの三センチ上あたりからオマンコの上半分にかけて、黒っぽい産毛が生えてきたのには、ちょっと困った——のは、サチじゃなくてご主人様。インモウが無くて名札でオマンコの割れ目がかくれてればワイセツじゃないから、サチをすっぱだかで引き回せる。縄でしばったりしても、ガキの遊びだから許される。おまわりさんのオスミツキだ。

サチの産毛は大人のインモウほどは黒くも太くもないし、モジャモジャでなくスカスカだけど。やっぱりワイセツになるんじゃないかな。サチはタイホされちゃうかもしれない。模型飛行機は飛び過ぎて無くなっちゃっても次のを買ってもらえるだろうけれど、二人目のどれいは無理だろうな。

サチだって、刑務所へ入れられて弟妹と引きはなされるのはいやだ。ふたりが、今以上に肩身のせまい思いをする。

そこでご主人様がサチにくださったのが、安全カミソリ。うすい鉄板を折り曲げた歯ブラシみたいな変え歯式のカミソリ。うっかり歯の方向に引くと、簡単にはだが切れてしまうから、ちっとも安全じゃないけど。そんなに深くは切れないから、まあまあ安全って意

味だろう。

このカミソリでワイセツのおそれがある部分をそってしまえと命令された。

ところが、大だんな様がストップをかけた——というのは、正確じゃない。赤信号と青信号が同時。どういうことかという。

「おまえは、まだまだガキだな。てい毛の楽しみが分かっておらん」とは、息子への言葉。

親子で風ろへ入って、そこでワシがサチの毛をそってやろう——となった。自分でそるのは危ないからなんて、おためごかしのオブラートも無い。

まあいちおう、そり方の講尺とかはあったけど、それもサド本位というか、はだを傷つけない方法じゃなくて、逆ぞりのほうが深くそれるとか、シャボンを使わないほうが（サチが）痛がって面白いが、何度もくり返すとサメはだになってだき心地が悪くなるとか。そんなのばかり。

結局はシャボンを使ってくれた。ヒゲそり専用のあわスプレーも売ってるそうだけど、大だんな様が愛用なさってるシャボンあわ立てセットというのかな。とう器の皿の上で石けんを、お末茶を点てるやつみたいな太い刷毛であわ立てて。その刷毛で、お股にぬりこめられた。

顔に使う道具だから——サチのオマンコをきたないかと思ってない証こだよな。

というか。おく様と同じで、何でもかんでも、サチをいじめる道具に使うってことだろう。

というのも。ペタペタとあわをぬって、ではそりましょう——じゃなかった。関係ないのに乳首にまであわをぬったり。刷毛の先っぽでしつこくコチンコをくすぐったり。メコ穴にずっぴりつつこんで、中でぐりぐり回したり。手で優しくくすぐられる百倍は気持ち良かったぞ。乳首をつねりながらコチンコをくすぐるとか。コチンコのピアスをねじりながら刷毛をオマンコに出し入れしたり。

これまででいちばん高くまでふき飛ばされて、雲の上をただよっている間に、つるつるにされちゃった。ほんとは、サチの意識がしゃんとしてから、はずかしがるのをからか

いながらそりたかったんじゃないかな。でも、その楽しみをあきらめなければならない理由が生じたんだ。

ざばあっと冷水をぶっかけて雲の上からつき落としたのは、家政婦のチヨお姉様（と呼ぶように、サチたちは言い付けられてる）。後ろにはもれなく、こわい顔のおく様がひかえている。なんてじょう談を言ってる場合じゃない。おく様は額からツノどころか、赤オニがふるえ上がるくらいの形相をしてる。

あごをくいっと反らせて、ついて来いの仕種。

きっと、これまでとは比べ物にならないくらいの残こくなセッカンをされるんだろうなと、胸だけじゃなくて内臓全部がねじ切られるような思いで、それでもだつ衣室で大急ぎで身体をふいて（ろう下をぬらしたら、余計にしかられる）、おく様とお姉様に前後をはさまれて、裏庭へ引き出された。

悪いのは大だんな様とご主人様なんだけど、とぼっちは全部サチがかぶる。ただ、まあ……ふき上げられた高さに比例して大声でさげんでた記おくがうっすらと残ってるから、サチも悪いっちゃ悪いけど、サルグツワをかましてくれなかったのは、大だんな様の手落ちじゃなくて意地悪だろう。勝手口から、大だんな様とご主人様の顔がのぞいてる。

反対に、すぐ目の前の小屋は固く閉ざされている。正太も美知も、目を閉じて耳をふさいで、うずくまってるんだろうな。

どんなにいじめられても平気だなんて、安心させようってウソだと思ってるだろうから——いじめられて本当に喜んでるって、信じさせなくちゃダメだ。それはそれで、自分に（半分だけ）ウソをつくことになるけど。

ばさばさっと、目の前に荒縄を放られた。

「ワタクシはお道具を取って来ます。その間に、バツを受ける準備をしておきなさい」

手にしていた、いつもの三尺の竹尺を放り捨てて、おく様は勝手口へ向かう。夫と息子がのぞいてるのに気づいたと思うけど、そんな気配はミジンも見せずに、お屋しきへもどって行った。

「縄の両はしを、その枝にかけるのよ」

お姉様の指図で縄のはしを枝に投げかけたけど、葉っぱにじゃまされて引っかからない。ので、木に登って、両はしを一メートルくらい開けて枝から垂らした。半ズボンの祥女だったころは木登りなんてお茶の子だったけど、全らのサチは苦勞した。はだが樹皮にこすれて気が散るし、ちょっとした出っ張りにピアスが引っかかると、気持ち良くなって痛いだけ。

木から降りると、枝の下に座りこんで、垂らした縄を足首に巻き結ぶ。分かってきたぞ。自分をうめる穴をほらされてる気分だ。

「そこで逆立ちするの」

オテンバ祥女の身軽さは、二か月やそこらでにぶっちゃいない。

枝の向こう側に垂れている縄をお姉様が引っ張る。サチの身体がびいんと伸びたけど、女ひとりの力じゃ宙づりにまでは出来ない。

でも——片手逆立ちをさせられて、うかした手を背中ではばられると、縄が枝に引っかけた輪っかになって、完全な宙づりになっちまった。残っていた片手も、同じようにしぼられた。

全身が逆海老に反って、うんとあごを引いても、乳首のピアスから（頭のほうへ向かって）垂れている名札のはしっこしか見えない。

バツを受ける準備が調っても、おく様はもどって来ない。きっと、竹尺を刀みたいにしてオマンコに打ちこまれる。内側のビラビラまで開いてるから、いつもより痛いだろうな。そう思うと、きゅんっとコチンコがとがってくる。

頭に血が下がって、軽い目まいがしだしたところになって、ようやくおく様が勝手口から出てきた。大だんな様に後ろからだきすくめられて引きずっている。

その夫婦げんかみみたいな光景よりも、おく様が手にしている得物を見て、サチは血が氷った。夜目にもぎらつく日本刀！

「歯引きしてあるから切れないっておっしゃっていたではありませんか」

「切れなくても、ガキの骨くらいはたたき折れる」

「大げさな。か弱い女の細腕ですよ」

「バカ者。ゼンマイをねじ切るのは女と、昔から相場は決まっている」

サチとおんなじことを言ってる——なんて感心してる場合じゃない。歯をつぶしてるといっても、本物の刀は分厚い鉄の板だぞ。大だんな様の言い分は事実だろう。

なんとか止めてほしい。けど、大だんな様の権力がゆいいつ通用しない相手がおく様だから……サチ、どうなるんだろ。

「軍刀は武人のタマシイだ。女子供にさわらせるわけにはいかん」

そうか。大だんな様は五十才だから、戦時中は軍人だったんだ——と、歴史を感じてる場合でもない。

「民主国家平和国家で、なにホウ建的なことをおっしゃってるのです。ご自分で巻いた種ではありませんか」

ヒステリーを起こした女に理くつは通用しない。女のオレが言うのもおかしいけど。

大だんな様も、そう思ったんだろう。おく様をつき飛ばすなり、地面に落ちてた竹尺を拾って。

バギイン！

たおれているおく様の太腿にたたき付けた。

「きゃああっ……？！」

竹尺がへし折れた。

「五郎！」

大だんな様が息子を呼びつけた。

「その刀で、同じところをたたいてやれ。こうではないぞ、こうだ」

手刀を切って、それからお尻ペンペンみたいに手の平をふった。

「でも……骨が折れるって……」

「身はばで打てば力が分散される。それに、おまえはまだママよりも非力だ。遠りよは無

用。思い切りぶったたけ」

「でも……」

五郎様は、おく様を取り落した刀と母親と父親との間で視線をさ迷わせている。

「五郎！」

大だんな様がいつかつ。

「母親といえども女。男である息子に従えと大見得を切ったのは、あれはウソか」

「……………」

従わせるのとたたくのは……サチに対してなら同じことだな。

「サチの持ち主はだれだ？」

名前を出されて、こっちがどぎまぎ。

「セイサツヨダツと見捨てることは、同じではないぞ。むしろ逆だ」

あ……不意に思い当たった。これを金貨にして、家長の心得を教えようとしてるんじゃないかな。

五郎様が、決心を固めたって顔で刀を拾い上げた。右手にぎゅつとにぎり閉めて。

「五郎さん……おやめな」

「ええいっ！」

バシン！

「……………！」

痛いのと、息子にたたかれたショックとで、おく様は顔をしかめたまま絶句。

「ワシが本気でたたいた物差と、ガキの日本刀と、どちらが痛かったか？」

おく様はサチを、青オニがハンニャの面をかぶったような形相でにらみ付けてから、ぎりぎりとし食いしばった歯のすき間からおし出したような声で言った。

「よく、分かりました」

絶対にちっとも分かってないぞ。

でも、大だんな様は満足そうにうなずいた。

「よかろう。とはいえ、このままでは、おまえの腹の虫も納まるまい。そうだな……」

息子の手から刀をもぎ取って。

「物差よりも厳しいが、おまえのどれいに大け我をさせずに済む方法を考えてやれ」

そんなの、セッカンされる当人にだって答えられない無理難題だぞ。

でも、ご主人様は、すぐに答を見つけた。

「これなんか、どうかな」

余っている荒縄の束をほぐして四つ折りにして。

ばささっ……ふり回してみても、あまり痛くなさそう。でも、大だんな様の眼鏡には適ったみたい。

「チョ。バケツに中性洗材と水を入れて来い。ハサミも要るぞ」

お姉様が不得意要領のまま、それでもだんな様（お姉様も、おく様と同じ呼び方をして  
いる）がおく様に手を上げるなんて天下の一大事だから、マッハ15のスーパージェッター  
で品物をそろえた。

大だんな様は荒縄を一メートルほどの長さに切りそろえて四本を束ね、根本の十センチ  
くらいを短い縄で巻き閉めた。同じのを二つ作って、一方は中性洗材をとかした水につけ  
てもみ洗いをして、しばらくそのまま。

二つの縄束を両手に持って、まだへたりこんでいるおく様に近づくと。

「ケツを向けろ」

おく様は、いつもの強妻家とは打って変わった大だんな様のあやつり人形。

ばさっ、ばしん。

ぶゅん、バチイン！

大だんな様が、おく様のお尻に左右の鞭を軽くたたきこんだ。

「物差より痛いのは分かったな。これで、気が済むまでサチを泣かせてやれ——泣かせら  
れるものならな」

ひと言多いぞ、大だんな様。意地も悪い。



おく様は、意地になってもサチを泣かそうとするだろう。でも大だんな様は口には出さなくても、泣くなとサチにはおっしゃってるんだよな。それくらい分かる。

おく様は立ち上がって、大だんな様がまたバケツに放りこんだ縄束の鞭を手にとった。

顔面そう白。こめかみに青筋が立ってる。

「こんちくしょう！」

ぶりゅうん、バヂイン！

「かはっ……！」

悲鳴を上げる余ゆうも無い激痛。縄が四本もあるから、メコ筋に食いこむだけじゃなく、まわりも打ちすえられて、ピアスの名札もはね飛んだ。

肉体的なショックも大きかったけれど、おく様に心の底からにくまれていると分かったことのほうがつらい。「ザアマス」とかは使わないけど、お上品な言葉使いで、サチのことは冷たく軽べつしてて、サチへのセッカンは一毛も生えていない小むすめどころかガキにウツツをぬかす大だんな様への愛想つかしとシットが混ぜこぜの、うさ晴らし。うまく言い表わせないけど。大だんな様へのうっぷんをサチにぶつけてるだけだと思っていたのに。オトナのくせに、ガキを本気でにくむなんて……おく様がこわい。

「こわしてやる！」

ぶりゅうん、ズバッチイン！

「変ちくりんなかざりなんか、千切ってやる！」

ぶんん、バシイッ！

「ぎびいっ……！！」

コチンコが千切れたと確信したほどの激痛。身体をゆすると、コチンコの名札がゆれたので、まだくっついていてとだけは分かった。

「強情な子だ。これだけしても、泣きもしないし許しもこわない」

言われてみたら。許しをこわないのは、そんなのムダだとわかってるからだけ。許してもらえないのは分かかって、あまえ気分と大だんな様やご主人様に喜んでもらおうと思

って「許してください」って言うことはあるけど。

でも、たしかに……泣いたことはないな。目からあせが出るなんて強がってはきたけど、大声で泣いたことがないのは事実だ。なぜなんだろう。ゆっくり考えているひまなんて無い。

「なんだかぬるぬるして、にぎりにくいわね」

「中性洗材のせいだな。しかし、水だけより染みこみやすいから、縄がずっと重くなる利点がある。い力は増しているぞ」

あ、裏に何かかくしてる言い方だ。それくらいは分かるようになってる。

「そうですか」

おく様はスカートからハンカチを取り出して、にぎりの部分に巻き付けた。家にいるときでもハンカチを持ってるなんて、身だしなみがきちんとしてるんだな。

「これで、少しは効くでしょう」

ぶんっ、バチン！

「ひいひい……」

これまでの三発に比べると、ずっと軽かった。きっと、冷静を取りもどしたんだ。サチも、お付き合いで悲鳴を上げる余ゆうが出来た。

ぶん、バチン。

「痛いっ……」

ぶん、バチン。

「もう、許してよお……サチが悪かったです」

おしばいは、こちらへんが限度だと思う。ウソ泣きは見破られる。

「うるさい。心にもないことを言うんじゃない」

バチン、バチン、バチン。

めった打ちされたけど、一発ずつはたいしたことなかった。

「面の皮だけでなく、ここの皮も厚いのね」

おく様が、縄束のにぎりをオマンコにねじ入れながら、いまいましそうに言う。

四本を束ねてさらに荒縄を巻き付けたくらい、どうってことない。ホッピングの金具とかチョーク十本に比べたら、への河童だ。ハンカチは巻いてあるし、中性洗材が染みてぬるぬるしてるから……あ、大だんな様がかくしているのが何か分かったぞ。

荒縄って毛羽が太くて、はだをこすられたら引っかき傷とか出来ちまう。けど、中性洗材で表面がすべればそれが防げる。サチのオマンコを守るってよりは、オモチャがこわれないようにしたってところだろうけど。やっぱり、素直に感謝しよう。

「明日の朝まで、このままにしておきます。よろしいですわね」

大だんな様の許可を得るあたり、もう頭から血は下がってる。サチは逆さつりにされて、頭へ血が下がりっぱなしだけど。

「いや、ダメだ。何時間も逆さづりにしていると、心臓に負担がかかり過ぎて死ぬおそれがある。せいぜい、一時間だ」

おく様はサチのオマンコに荒縄の鞭をつき立てたまま、ちょっと考えこんだ。一時間やそこらじゃ腹の虫が収まらないんだろうけど、死んでもかまわないとまでは思っていない。それは自分の立場とかじゃなくて、良心のうしろめたさだと思う。警察も山持家の下男みたいなものだから、お屋しきの中でよその子が死んだくらい、どうにでももみ消せるもん——と、そこまで考えて。ぞおっとした。おく様にだけは絶対に、(心の底からは)にくまれないようにしよう。と言うのは簡単だけど。具体的には、どうすればいいんだろ。ご主人様はともかく、大だんな様にはいじめられても可愛がられても、おく様の逆りんにふれるんだよな。かといって、大だんな様に愛想をつかされたら……ほんとにオレたち三人のセイサツヨダツを持ってるのは大だんな様なんだから。

「よろしいです。サチへのセツカンは、これでかん弁してやります」

おく様がきっぱりと言った。きっぱり過ぎるひびきがあった。

「この子が五郎さんと同じ、人の子だと思うから腹が立つのです。犬小屋住まいなので、犬としてあつかいます」

今だってそうじゃないかと反発したけど。ちっともそうじゃなかったと思い知らされた。模型飛行機を飛ばしに原っぱへ連れてかれたときの犬ごっこ。あれと同じにされた。手足を曲げてしばられて、ひじとひざの四つんばいでしか歩けなくされたんだ。そして、犬小屋の前のくいにつなぐクサリを短くされた。

「学校へ行くときと、五郎さんがおまえて遊ぶときだけは、立って歩くことを許します」  
「背中を流させるのと、残り湯を使わせるのは、これまで通りだよ。アカまみれじゃボクの面子にかかわるんだからね」

自分の都合っちゃそうなんだろうけど、それでもかばってくれたように思えて、うれしかったな。

これで、サチのこれからの待ぐうが決まったんだけど。思ってたより厳しかったし、はずかしかった。クサリが短くなったので、くみ取り口の上に設けられているトイレが使えなくなった。浅い木の箱に砂が入れられて、それがメス犬サチの専用トイレになった。オシッコはともかく（じゃない！）ウンチもそこでさせられた。そして、お尻もふけないし。

砂がよごれたら——学校から帰ってメス犬にもどされる前に、ウンチだけは（素手で）砂をまぶしてくみ取り口へ捨てて、オシッコの部分はやっぱり素手ですくってバケツへ入れて水で洗って庭のすみへ広げて、かわかす。それが終わったら、自分で首輪を巻いて犬小屋の前で四つんばいになって、チョお姉様が手足をしばりにくるのを待つんだ。

まあ、お尻のよごれは、ご主人様の背中を流す（だけじゃ済まない）前に、バケツに水をもらって清めてからお屋しきへ入るし。できるだけ学校のトイレを使うようにしていたから、そんなに苦労じゃなかった。のは、一週間くらいだけで、学校でトイレを使えなくなる事件が起きるんだけど。

その前に、おく様から受けた犬あつかいを、もうちょっと説明しとく。

これまでは、サチたちの食事は食べ残しをあてがわれていたんだけど。それが、正太と美知だけになった。サチの分は、野菜のクズとか魚のアラを生そのまま洗面器にぶちこんだ、犬もネコも食べそうにないゴミになった。生といっても、食中毒とかを起こされちゃまず

いと冷静に判断してくれたんだろう。湯通しはしてあった。それでも生ぐさくて、はき気がした。はき気がしないときもあった。それは、大量の塩がまぶされているとき。生物は塩分を取らなければ栄養失調になるからだけど、口の中が痛くなるほど塩からくするのは、やっぱり意地悪だ。

そんなのは食べないで、お腹がすいても学校の給食だけでしのぎたいくらいだけど、それも出来ない。食べ残すと、また湯通しし直して、次の分と一っしょに食べさせられる。それを食べなくても、無理強いに口へおしこまれることもないし、セッカンもされなかった。おく様は、こう言うだけだ。

「それでは、おまえが食べない分は正太と美知に食べさせます」

洗面器に顔をつっこんで（手も足も折り曲げてしばられてる）平らげるしかないじゃないか。どんなにセッカンされたって、ここまではひどくなかったぞってくらいに、目があせをかいて止まらなかった。

みじめの下にはみじめがあるもんだなって痛感した。

## 女子のリンチ

ちょろっと言いかけた、トイレが使えなくなった事件だけど。事の発たんは林陽太くんだった。び目しゅうれい品行方正成績優しゅうで全学年女子のあこがれの王子様と言っても過言ではないくらいなのに、ご主人様に負けないうらいエッチで、その方面の知識も豊富だ。と言っても、フェラチオのことを笛ラヂオなんて覚えてたくらいだから、底は知れてるけどな。

陽太くんはもう精液が出るから、ご主人様はサチとのセックスを禁止にしている、口とケツマンコしか使わせなかったんだけど。コンドームというのを家から持って来た。平べったい箱から出すと、輪ゴムの中にうすい幕が張ってあるみたいな形をしてる。

「精液が出ても、コンドームの中に貯まってオマンコには入らないから、にんしんしないんだ」

だから、ボクにもオマンコでセックスをさせてくれというのが、陽太くんの言い分。

「ゴムサックはオトナ用だろ。ぶかぶかなんじゃないか？」

ご主人様も知っているみたいだ。大だんな様から教わったのかな。

「だいじょうぶだよ。大は小をかねるっていうだろ」

「しゃもじは耳かきにならないぞ。まあ、いいや。着けてみろよ。ぶかぶかだったら、中でぬけるおそれがあるからダメだぞ」

陽太くんは半ズボンとパンツをひとまとめにぬいで、みんなが見ている前でオチンポをしごいた。五年のときまでは、男子でもパンツを見られるのをいやがるやつが多かったけど、サチを使うためにはオチンポを出してぼっ起させる必要があるから——みんな平気になってやがる。

陽太くんは大きくしたオチンポの先にコンドームを当てて、くるくると巻き下げた。

へえ。輪ゴムに見えてたのは、幕を巻き付けてたんだ。

陽太くんのオチンポは、うすい幕で包まれてしまった。けど、ご主人様が心配した通り、ぶかぶかだ。幕のあちこちにしわが寄ってる。ところが陽太くんは本物の輪ゴムを二重巻にして、コンドームの上からオチンポの根元にはめた。

「これならぬけたりしないだろ」

コンドームの先っぽをつまんで引っ張ると、オチンポの三倍くらいの長さまでのびたけど、ぬけはしなかった。

「まあ、その手はあるんだけど——ゴムとチンコがこすれて気持ち良くないって親父が言ってたぞ」

ご主人様は最近、学校では大だんな様のことを『親父』って言ってる。前は『パパ』だったけど、サチとセックスをしてオトナになった気分なのかな。

「まあ、いいや。ゴムサックを着けてのセックスは本物じゃないけど、それでいいんなら、

やらせてやるよ」

体育用具倉庫の中には、もうマットがしいてあって、サチを使う準備は整っている。

陽太くんは、すもうの立ち合いみたいな勢いでサチをおしたおした。オマンコに入れるのは初めてでも、ケツマンコでじゅうぶんに練習してるから、まごまごしたりはしなかった。

「痛い……」

思わずうめいちまった。サチが、あまりぬれてなかったせいもある。

だって、相手が陽太くんだぞ。他の女子みたいにお熱じゃなかったけど、やっぱりすこしはあこがれてた……半ズボンははいてたころは。もしも、好きだって告白されてせまられたら、キスくらいは許してたんじゃないかな。だから、その反動っていうのかな。陽太くんには、フェラチオするのもケツマンコを使われるのも、ちっともエツ逆しなかったんだ。あまりぬれないし腰もうずかなかった。

だけど、コンドームのせいもあると思う。すぶうっと入ってくるんじゃなくて、つかえた感じになっては、がじがじって進んで、またつかえる。これがご主人様だったら、がじがじのし激でエツ逆に行っちゃうんだろうけど、性どれいじゃなくて女の子の心をすこし取りもどしてるせいで、たまらなく不快だった。

陽太くんも、あまり気持ち良くないみたいだ。最近みんな、女のあつかい方を覚えたというか、楽しみ方が分かってきて——つつこんで、そのままガシガシ出し入れはしなくなった。うんとおくまで（といっても、ガキのオチンポじゃ底にぶつかったりはしない）入れて、しばらく動かずにサチ布団のやわらかさを堪能したり、入れたまま乳首やコチンコを可愛がってくれたりして、たいていはご主人様に「早くしろ」ってせかされてからガシガシを始める。

でも陽太くんは最初からガシガシつき入れてきて、それでもなかなか射精しない。

「ちええ。セックスなんて、ちっとも気持ち良くない」

「言っただろ。ゴムサックは本物じゃないって。ほんと、オマンコのほうがケツマンコ

より楽しめるんだぞ」

「そうかな。ケツマンコのほうが閉め付けてくるから、ボクは好きだ」

「オレは断然フェラチオだ。舌でペロペロなめてくれるのが、すっごくし激的だよ」

「うるさいな、気が散る」

「なんだよ、自分から言い出したくせに」

サチは、どれも好きだぞ。セックスは、男が女を支配する基本形だろ。ケツマンコは、せまい穴を無理矢理に広げられる熱くて痛い感覚が病みつきだし。フェラチオは、男に方仕してるんだとしみじみエツ逆だし。だけどフェラチオは自分であれこれするより、頭をかかえこまれて一方的にガシガシのどのおくまでつきこまれるのが、いじめられてる気分が盛り上がる。

このコンドーム付きのセックスは、あまり好きじゃない。うすい幕がメコ穴にへばり着いて、その向こうでオチンポが動いてるみたい。もどかしい。ゴムがオチンポにぴったりくっついてれば話は別なんだろうけど。

だけど、延々とピストンされるのは、責め続けられてるって気分になるから——気持ち良いのとも痛いのもちがう良さがあるかもしれない。

なんて考えてはみたけど、やっぱり、早く終わってくれないかなという思いしかなかった。せっかく（しばられたりしなくて）手が空いてるのに、ピアスをこねくる気にもなれなかった。

それは、サチの波乱万乗の生活の中では、わざわざ思い出すこともない、ささやかなエピソードのはずだったんだけど。とんでもない結果を招いちまった。

というのも。ついに本物のセックスをしたという陽太くんの思いが態度になって表われたんだ。ご主人様はコンドーム付きのセックスは本物じゃないって言うし、サチもそんな気はするけど。オチンポをメコ穴に送入して射精したって意味じゃ『本物』だよな。

それで陽太くんは天ぐになった——というのはちがうと思うけど。クラスメートの女子



をお子様あつかいしましたんだ。

五年生のときだけでも、かれに告白した女子は片手の指をこえている。たいていはまわりにけしかけられて、ダメ元くらいの気分で当たってくだけでアッケラカンなんだけど。大野木結花ちゃんは本気だったみたい。

これまでは「女の子と付き合うって、良く分からないから」とか「みんなで仲良くするだけじゃだめなのかな」なんて、まあ門前ばらいしてたのに。結花ちゃんには、あっさりOKした。

これは、後日に陽太くん本人から聞いた話なんだけど。告白が二人きりの場所だったんで、結花ちゃんをだき閉めてキスして。ここまでは、結花ちゃんもおとなしくしてたので、まだまだ行けるって思ったんだそう。スカートの下に手を入れてメコ筋を指でなぞるくらい、サチにしているひどいことに比べたら、ごく神土的なスキンシップのつもりだったそう。でも、結花ちゃんはびっくりして泣き出しちゃった。

「泣くなよ。大げさだなあ。こい人同士なら、これくらい当たり前だぞ」

こういうのを、火に油を注ぐっていうんだよな。結花ちゃんにはげ出して——親友にうったえて。翌日には六年女子がいつち団結して陽太くんにこう議した。

「オママゴトにはつきあってらんないよ。サチみたいには言わないけど、こい人になら身体を許すくらいふつうだろ」

引き合いに出されたせいで、サチが悪者になった。

翌日の放課後。サチは女子の集団に取り囲まれた。

「ちょっと来てくれる？」

質問でもお願いでもなく、有無を言わず引ッ立てる気構え。

「勝手なことをするなよ。サチはオレのどれいだぞ」

ご主人様はかばってくれたんだけど、女子の団結力には親の七光りも通用しない。

「女子だけの問題だから、男子は口出ししないで」

そりゃ、サチがあれ<sup>い</sup>ばエッチには不自由しないけど、男子にとって女子はそれだけの存

在じゃないよね。チャホヤされたいし、ステキとか思われたいんだろう。女子だって、そうなんだから。サチだって、男子からいじめられるのはチャホヤの親せきだと思ってる。オチンポへの方仕だって、男子が喜んでくれるから、やりがいがある。

サチのことは、ともかく。だから、ご主人様も女子から総スカンは食いたくない。ので、それ以上はかばってくれなかった。ついて来るなどと言われて、おとなしくサチを見送った。

最初は、なんで急に女子がサチを目の敵にし始めたのか分からなかった。まあ、みんな帰り支度してるし、そんなにやっかいなことにはならないかなって、あまく考えてたんだけど。

女子トイレの前にはすでに見張りの子が四人ばかり来ていた。サチの敵は六年女子の三分の一だけ……じゃないよな。これ以上つめこむと、動きづらいつただけだろう。

四人はみんなのランドセルを預かって、見張り続ける。これで安心してサチを料理できるな。

「あなたのせいで、男子がみんなエッチになったのよ」

久保田聡子ちゃんに決めつけられた。別にサチのせいでエッチになったんじゃない。男子は元々が大人の助平でエッチなんだ。前は先生や女子の手前でネコをかぶってたんだけど、サチというネズミを目の前に投げ出されたもんだから本性を表わしただけ——なんて正論は通じそうにないので、だまってる。

サチは、この子が苦手。父親が町会議員のボスみたいな人で、ご主人様が七光りなら六光りくらいはある。女子のまとめ役で、サチを目の敵にしてる——というのは、サチのひがみかもしれないけど。

「はだかで学校に来るなんてバカな真似は、もうやめてよね。男子とエッチな遊びもしてはダメ。約束するなら、今日だけは見のがしてあげる」

「サチだって、こんなはずかしいことはしたくないよ」

反論したけど——ほんとかなと、心のすみでだれかがささやいている。のは、話がややこしくなるので無視。

「だけど、ご主人様がそうしろっておっしゃるんだから。サチたちきょうだいのめんどうを見てくださるよう、大だんな様をお願いしてくれたのはご主人様だから。サチはご主人様に逆らえないんだ」

これも火に油を注いでるって分かってるけど。ただ事実を述べているだけじゃない。聡子ちゃんを始めとする女子への反発もあった。親が居て貧ぼうもしていないから、取りまましていられるんだ。もしも、サチと同じ境ぐうになったら、サチと同じ選たくをしていたら。弟妹といっしょに暮らすためなら下女だろうと性どれいだろうと、めんどうを見てくださる人の言いなりになるに決まってる。

それに、みんな男子と張り合ってるけど、みんなもサチも女だぞ。男女平等とかいうけど、男のほうが身体が大きいし腕力もあるし経済力だってある。女は男に支配されて保護してもらいたいっていう本能がある。ライオンはオスが何頭ものメスを従えているし、サル山のボスは強いオスに決まってるじゃないか。何百万年（だっけ、何億年だっけ？）もかけて進化してきた生物の本能は、中国四千年の歴史だって、簡単には引っくり返せない。というか、男女平等なんて言い出したのは、ここ百年かそこの歴史だけじゃないか。ええと……実は、大だんな様からの受け売りだけど。正論だと思うぞ。

だから。聡子ちゃんだって、両親が亡くなったら、し設へ行きたくなければ、だれかの性どれいになってもおかしくはない。聡子ちゃんのご主人様になる人が大だんな様みたいなサドだったら、マゾに調教されるんだ。いや、調教ってのは当たってないと思う。女が男に支配されたいっていう本能は、そのままマゾに通じるんじゃないかな。つまり、男はサドで女はマゾ。これが、いちばん自然だと思う。世間体とか道徳とかが、それをじゃましてる——と、大だんな様は我が子に教育してる。

なんてことを、考えてるうちにも。聡子ちゃんの形相がおく様そっくりになってきた。「口で言っても分からないのなら、身体に言い聞かせてあげる」

ヤクザ映画みたいな台詞。てことは、聡子ちゃんはまだ冷静なのかな。冷静にイカリ心頭に達してるのもこわいけど。

包囲の輪が、じわっと縮まった。タコなぐりにされる。でも、相手は女子だ。逆らうなとはご主人様にも言われていない。オテンバ祥女の本領を……いや、やめとこう。また、正太と美知がいじめられるようになる。それにケンカになったら、先生がしゃしゃり出てくる。ご主人様は七光りで聡子ちゃんは六光り。サチが悪者にされる——だけなら、へっちゃらだけど。学校では手に余る。し設に入れてしまえなんてなったら。大だんな様を取りなしてくれるとは思うけど……ああ、もうめんどくさい。相手は非力な女子だ。タコなぐりだったって、高が知れてる。おとなしくいじめられていよう。そう覚悟したとき。

「やだ。こいつ、くさいよ」

だれかがそう言うと、半数くらいの子がうなずいた。

心当たりは、ありすぎる。昨日はお風呂が無かった。犬小屋にもそこはかたなくにおいが染み着いているもんな。男子はどん感だけど、女子にはそれこそ犬みたいに鼻の利く子がいる。

「それじゃ、こらしめる前に、きれいにしてやりましょう。こっちの手がよごれちゃいますもの」

タコなぐりは後回しになって……ちっとも、良くない。他のイジメが追加されただけ。それは、みんなが手に持っている道具で分かる。

タイルゆか用の固いモップ（デッキブラシというんだっけ）、トイレ用の雑きん、じゃ口につないだホース。いちばんのきょう器は、便器そうじ用の棒タワシだ。試験管洗いの三倍は大きい。使ったことあるけど、すごいゴワゴワしてる。サチのオマンコだって、試験管洗いで処女幕を破られたときに比べたら、ずいぶんときたえられてるし。タワシをオマンコにつっこもうなんて変態でサドなことを女の子が……考えつくだろうな。サチにどんなことをしたか、男子も最近は遠りよがなくなったのか感覚がマヒしたのか、女子が聞いている教室でも、武勇伝と感ちがいいしてるもんな。

「そこにじっと立ってなさい」

聡子（呼び捨てにしてやる）の指図で、ホースの水がサチのはだかにたたきつけられる。

わざわざ先っぽを指でおさえて、ふん射にしてる。

好きにしてよと開き直ったのでもないけど。この三か月でご主人様にたっぷり調教されてしまっ。手で身体をかばったりはしない。かえって、相手をおこらせる。足を開いて、両手を頭の後ろで組んだ。この、オマンコの中までさらした無防備無ていこうのポーズが、いちばん心が落ち着く。だいいち、手のやり場に困らないのがいい。ほんとは後ろ手にし

ばってもらいたいけど、同性の同い年に今以上に軽べつされるのは、さすがにいやだ。

「においの元も洗わなくちゃだめ。そうじゃないったら」

聡子がホースをひったくって、サチの足元にしゃがみこんだ。オマンコにホースをつっこむ。ねらったのかぐう然なのか、メコ穴にすっぽり。たちまち下腹部がぼっこりふくらんできて、オシッコをチビリそうな感覚がつき上げてくる。

オマンコには、腸みたいに何リットルもは入らない（子宮はどうなってるんだろ？）。すぐに逆流しだした。

「きゃっ、きたない！」

聡子がホースを投げ捨てて飛び退く。考え無しだし土道不覚ごってやつだ。女の子だから婦道かな。ご主人様でも、腸を洗うときはお腹のふくらみ具合に注意してるし、大だんな様なんか、サチのが飛び散っても平然としてるんだぞ。後で厳しくお仕置されるけどな。

「いつまでつつ立ってるの。それじゃ洗えないでしょ」

立ってろと言ったのは聡子じゃないか。いちいち反発したくなる。けど、トイレのタイルゆかの上に大の字。足を広げろだの手がじゃまだと言う手間を省いてやった。ふてぶてしい態度だと思われるのは承知の上。女子の細腕。十人束になったって、男子五人分のイジメも出来ないさ。

反感が先に立って、ゼンマイをねじ切るのは女だったのを忘れてた。

ね転がったサチの両側に、デッキブラシを持った子がひとりずつ立った。結花は分かるけど、もうひとりが森山初美ちゃんだったのはショックだった。親友だと思っていたのに。親友だったからこそゲンメツして、にくさが百倍かな。

ふたりがデッキブラシを動かし始めたけど、まったくの手加減無し。タイルのゆかをこする動作そのまま。

男子だったら、相手が生身の人間だと考えて、いくらかは手加減してくれてる（というのが、最近になって分かってきた）。生身の人間じゃなくても。土まみれの大根をタワシで洗うときだって、皮をはがさないようにとかシッポを折らないようにとか注意するだろ。

サチは大根以下。そしてタイル以上に手荒にあつかわれてる。

「ぐえっ、くうう……」

お腹にブラシをたたきつけて、おへそをえぐるみたいに、こするってよりもつきこまれたり。

「ぎひっ、痛い痛い……」

乳首にたたきつけて、毛羽にピアスが引っかかっても、そのままこすられたり。

「ひいっ、ちょっとタンマ……」

コチンコのピアスをねらわれたり。

そして、いよいよ棒タワシの出番。ご主人様なら、真打登場ってな感じで乗り出してくるんだけど、聡子は手下（当人たちは親衛隊と言ってる）任せ。そのひとりの島村香苗って子が、サチの足をけっってもっと開かせ、その間にしゃがみこんだ。

ななめ上からの角度で棒タワシをオマンコにつき立てて、しゃにむにひねる。

試験管洗いより固い毛が、ごりごりとやわ肉をえぐる。

「痛い……ちょっとだけ待って」

腰をつき上げて角度を合わせ、棒タワシをメコ穴に導いた。

「あきたたわ。自分から入れに行くなんて。棒ならなんでもいいんでしょ。陽太くんのアレなんて、もったいないわ」

こわされないためには、こうするしかなかったんだよ。

でも、文字通りに墓穴をほってしまった。おくまでつつこまれて動かされると、激痛がはね上がって暴れまわる。

「ぎびいいいっつ……くそお！」

何が「くそお」なのか、自分にも分からない。ただひとつだけはっきりしてるのは——これだけひどくいじめられてるのに（サチはマゾだから、逆接でまちがってない）胸が切なくなったり腰がうずいたりもしない。胸は息苦しいほどにくやしさに満たされて、腰ではなく胃のあたりに冷たい固まりのような感情が居座ってる。

おく様に日本刀でたたかれそうになったときと似ている。あのときは、くやしいとかじゃなくて、きょうふだったけど。荒縄でたたかれてるときも、おく様がヒステリーを起こすのは当然だから、くやしいとは思わなかった。でも、ちっともエツ逆しないって点では同じ。

「ねえ、もうやめようよ。血が出てる」

だれかのおろおろ声で、棒タワシの動きが止まった。

「生理が始まったんじゃないの」

聡子は落ち着いてる。こいつ、もう初潮が来てるな。

「サチは、まだだぞ。中が傷ついた出血だ。オマンコがこわれちゃったら、結こんでなくなる。だから、もうかん弁して……ください」

「なに言ってるのよ」

まだつつこまれたままになってる棒タワシの取手をげしんとけられた。

「ぎゃんんんっつ……！」

オマンコのおくの子宮が暴発したような激痛が背中までつきぬけた。大の字にふんぞり返って(?) るどころじゃない。両手でお股をおさえてのた打ちまわった。

「そのままうつぶせになってなさい」

冷たい声。ご主人様だって、サチを生きうめのままほったらかして殺しかけたときは、本気で心配してくれたぞ。

サチが横向きのまま動けないでいると、寄ってたかってうつぶせにおさえこまれた。棒タワシの取手がゆかにおされて、オマンコを圧ぱくする。メコ穴のお腹に近い側がこねく

られて、ビリビリブザーみたいな電気が走った。これって、乳首やコチンコに走る電激よりも重たく分厚い。一気に山の中腹くらいまではふき飛ばされてもおかしくないのに——登山道とはまったく別の方角へおしやられてる。おし下げられてる。

背中とお尻にもデッキブラシがたたきつけられて、はだがすりむけるくらいにこすられた。名札のピアスが無いから、とつ然の激痛に悲鳴を上げたりはしないけど、単純に痛くて単純に不愉快だ。

全身がすり傷だらけ。にじみ出た血で、はだがうすく染まって。サチはぶったおれたまま、ぴくとも動かない。動くと、棒タワシにオマンコをえぐられるし、もったいじめられると分かってるからで、体力的に動けないわけじゃない……と、自分では思ってる。

ようやく「こらしめる前にきれいにする」という名目のイジメが終わった。サチだけでなく、全体にそんな分囲気がただよった。ホースの水も止められて、オマンコから棒タワシもぬいてもらえた。

だけど、聡子だけは物足りないみたい。バケツに水を満たして、便器用の表白材をカップで計って入れてる。

「これでふいてあげれば、においも取れるわね」

じょう談じゃない。劇薬だぞ。でも、サチがこう議したら、火に油だろうし……

「それ、皮ふに着いたら大変なことになる。やめようよ」

サチがためらってるうちに、初美ちゃんが反対してくれた。

「だいじょうぶ。用具ロッカーにはゴム手ぶくろもあるわ」

そうじゃなくて！

初美ちゃんも、それ以上は何も言わなかった。ほんとに、サチではなく自分の心配をただけなのかもしれない。

「でも……そうね。暴れられたらめんどうだわ。手足をおさえつけておいて」

親衛隊を気取ってるやつらが、四人がかりでサチの手足をおさえこんだ。

「結花ちゃん。あなたがふいてやって」



「え？ でも……」

初美ちゃんの言葉でびびったかな。

「だれのために、こいつをこらしめてるか、分かってるの？」

その言葉を真に受けたのか六光りに負けたのか。結花ちゃんはゴム手ぶくろをして、トイレ雑きんをバケツにひたした。

「しばらくでいいわよ」

結花ちゃんが、おそろおそろ雑きんをサチの背中へ近づけた。

べちゃっとした、冷たい感しょく。ひんやりして案外と気持ち良かった——のは、いっしゅん。背中一面に針をつきさされるような痛みにおそわれた。

「くっ……」

サチの反応が大したことないと見定めて、雑きんの動きが大きくなった。それにつれて、痛みが強くなる……なんてもんじゃない。燃えるように熱い。真っ赤に焼けた無数の針が、背中全体を深くつきさして、そのままはだを切りさいている。

「やめて！ 痛い、熱い！ 死んじゃうよっっ！」

降りしきる雨の下で生きうめにされたときよりも、ずっと強いきょうふにおそわれた。たぶん死にはしない。でも、背中一面にケロイドが残る。ご主人様にも大だんな様にも愛想づかしされる。

「やめろよ、やめろったら！」

どうやったか覚えていない。火事場のバカちからってやつだ。オレは四人をはね飛ばして起き上がった。ゆかに転がってるホースをつかんでじゃ口のどこへ行って、カランをいっぱいにひねって、背中に水を浴びせた。

熱いのはすぐに消えたけど、針でつきさされる感覚は残ってる。それでも、これまでは五センチもささっていたのが一センチくらいにはなった。

ふり返ったら、みんな氷りついてる。はね飛ばした四人は、尻もちをついたまま。スカートがまくれてパンツで直座りしてる子も。ゆかがぬれてるから、しばらくは気持ち悪い

だろうなって、取るに足りない心配をして、内心で苦笑する。

うん。サチはすっかり平常心を取りもどしたぞ。

サチはみんなに背を向けて、い風堂々と立ち去った。すっぱだかで変ちくりんな（サチはけっこう気に入ってる）名札のピアスをぶら下げて、お股から血を流しながら背中のはきっとイナバの白ウサギみたいになってるだろうけど、それでも気分はい風堂々だった。

## リンチを志願

高用した気分は、教室で待っててくれたご主人様に事のてん末を報告したら、ぺしゃんこになってしまった。

「聡子をおこらせたのは、まずいな」

ご主人様は、けっこう深刻そうに考えこんだ。

「あいつの親父は町議会のハバツのリョウシュウだからな。親が出て来たら、財界と政界の対立になる」

小難しいどころか大難しいことを言ってる。大だんな様からの受け売りだな。

「とにかく、ガキのケンカで収めなくちゃ」

これは、良く分かる。

「今日は、もういいから。明日にでも聡子に土下座して謝れ」

なんでだよ——という反発は、ご主人様にではなく聡子に向かってる。

「ご主人様の命令だから、そうしますけど……久保田さんも大野木さんも、サチに、はだかで学校に来るなとか、男子とエッチなことをするなと言ってます。それでも良いんですか？」

「ダメだ」

打てばひびくなよ。

「それじゃ、どうすれば良いんですか?!」

「聡子の気が済むまでリンチだかこらしめだかのサンドバッグにされてろ」

「そんな……」

セイサツヨダツと見捨てるのとはちがうって、大だんな様に教えられたじゃないか。

「救急車を呼ぶようなことになったら、親と警察が出てくるぞって、言ってやれ。そう無茶はしないさ」

「……………」

やっぱり見捨てられた。そう思ったんだけど、気づいてしまったんだ。半ズボンの前が、これまで見たことがないくらい、もっこりなんてもものじゃなくて、はち切れそうになっている。

「サチがいじめられるのが、そんなに……」

言わずもがなってやつだな。

「最近は、そうでもなかったんだけどな」

ご主人様がチャックを下げた。ビョーンって感じでオチンポが飛び出す。

放課後の教室でだれも居ないからって、なんて大たんな——てのは、今さらだけど。サチとセックスするときより大きくなってる（ように見える）のには、どぎまぎ。

「サチが聡子たちにリンチされるって、レズでSMだろ。二重のエッチだ。想像しただけで、こうなっちゃうんだよ」

「……………」

形の上ではそうだろうけど。何かがちがうと思う。だって、サチはちっともエツ逆しなかったんだから……あれ? なんだって、今ごろになって、ぬれてくるんだよ。胸もきゅんきゅんしてくるし。

「何年前に大ズモウの順業が山の向こうに来て、評判になっただろ。だけど、それより盛り上がったのが、オレが一年のとき秋祭に来た女ズモウだったな。オトナの女が、おっぱい丸出し、フンドシー本でズモウを取るんだ。神社からはなれた場所で興行してたから、

屋台とかは少なく、食べ物とお酒ばかり売ってたな。見物客は男衆ばかりで……そうか、あれはオレへの英才教育だったのかな」

エッチの英才教育なんて、あるもんか。

「スモウ取りたって、デブばかりじゃないぞ」

ご主人様が、サチのはだかを今さらに見つめて。

「せいぜいサチの三割増しくらいの、お姉さんなんだろうけど、まわりが大きなオバさんばかりだから、可愛い女の子にしか見えなかったな」

どこまで話がとっ散らかるんだよ。ご主人様のお言葉だから、おとなしく聞いてるってわけでもなくて。女の人のはだかでスモウだなんて、ぞくぞくする。

「トーナメントの後で負け残り戦てのがあった。勝ちぬきじゃないぞ。勝つまで土俵から降りれないんだ。相手は目方が倍以上のベテランばかりだぞ。あせまみれ砂まみれになって、最後は半泣きで投げ飛ばされてた」

相手がそんなに体格はちがわない男子だけど、サチも似たようなことをされてるな。

「全員に負けこしたバツで、フンドシも外してシコをふまされたっけ」

サチなんか、三対一の『再取組』とかオマンコつなわたりとかだぞ。

「その子も、けっこうきたえてたな。シコをふむ足なんか、びいんとのびて、頭の上まで上がった。だれも、足なんか見てなかったけど」

ご主人様が、ふううっと貯め息をついた。いつの間にかオチンポもおとなしくなってる。

「だから、どんなふうにいじめられたか、くわしく報告するんだぞ」

何が「だから」なんだか良く分からないけど、ご主人様の命令には絶対服従だ。まったく気乗りはしないのに。きっと、また同じような（もっとひどい）ことをされるに決まっているのに、腰のおくが熱くうずいてくる。

「あ、そうだ。どうせ、次も女子便所だろうな。一番おくは使用禁止だっけ」

便器をはめる穴の寸法をまちがえたので、板をつぎ足してあったそうだ。それが長年（学校の創立は戦前だぞ）の間にくさったかして、今年の二月に便器がドボン。大人でも落ち

てしまいそうな大穴が空いた。どうせ来年には簡易水洗に改築するんだからと、修理はしないで『使用禁止／つかうな』の張り紙だけ。ほっとくと虫がわくし、生徒には危険だからと、先生が当番になって週に一回だけそうじしてる。

「先回りして、かくれていよう」

うげ、しゅ味悪い。でも、ご主人様が見守ってくれるのなら、ほんとに危険なときは止めてくれるかな。何がほんとに危険か、きちんと判断できるかあやしいけれど——いざとなれば、大声で助けを求めればいいんだし。そのためには、サルグツワをかまされないようにだけは用心しなくちゃ。

胸きゅんきゅんと腰だけじゃなくて、乳首もコチンコもとんがってきちゃった。ご主人様には気づかれなかった。これがイスに腰かけてたりしたら、座面に染みが付いたりするけど、こういうときはご主人様の前にひざまずいて開きやくだから——やっぱり、ばれてたかもしれない。

その日はヤジロベエのランドセル運びも道草も無しで、どころかサチのランドセルをご主人様が持ってくれて、取り巻きも校門で追いはらって、お屋しきへ直行。ご主人様が教員室の電話を借りて呼んでくれたお医者様は先にとう着していて、サチが犬になる前に手当てをしてくれた。

表白材で背中に火傷(?)してたけど、ごく軽いから数日で治るし包帯もしなくてだいじょうぶだった。メコ穴じゃなくて正しくはチツに負わされた傷のほうが深刻だった——というのは、ご主人様に言わせれば、だな。一週間ほどは中を安静にさせなさいと、セックスにドクターストップがかかったから。

結局、その期間は学校を休んだ。どうせ聡子のリンチはオマンコをいじめるんだろうから、安静じゃなくなるし。のほほんと過ごしといてから、「ごめんなさい、おわびにいじめてください」じゃサマにならない。

まあ、三日ばかりは、元から休ませるつもりだったそうだ。というのは、参観日と父兄面談日になってるから。サチのことは公然の秘密というか暗もくのりょう解になってるけ

ど、だからこそ、サチたち三きょうだいとは別の学年の親の中には、事情を知らない人も居る（かな。あちこち引き回されてるのに）。無用のし激はさけると、大だんな様からご主人様へのお達しらしい。

登下校の引き回しも学校でのサチ遊び（という名前が定着した）も無し。そして、おく様の犬あつかいもゆるくなった。

「おまえのせいでだんな様にセツカンされたアザも消えました。エサだけは元にもどしてあげます」

生ゴミを食わされずに、残り物をご飯もおかずもひとまとめに洗面器へ放りこまれて。手足の折りたたみはそのままだったから、文字通りの犬食いだったな。でも、お腹をくだすことはなくなった。

考えてみれば、生ゴミを食わすのは残飯をあてがうより手間だものな。まったく食えない物は選り分けなきゃならないし、食中毒防止に湯通ししなきゃならないし。一時のいかりが収まったら、そこまで手間ひまかけて（るのは、チヨお姉様）サチをいじめる根気は無いってことか。ご主人様の熱意を——もちろん、見習ってほしくはないけどな。

トイレなんて大した問題じゃないと、無理にでも思いこめば——これまでに比べたら気楽な暮らしかもしれないけど。めんどろな作業も増えた。ムダ毛の処理。ご主人様がくれたカミソリじゃなく、毛ヌキを使えと、大だんな様から直々に言いつかった。

カミソリを使っていると、毛が太くこゆくなっていくそう。それは、サチもいやだな。逆に一本ずつぬいていると、毛根まで取ってしまうから、そのうちに生えなくなるそう。

ふつうは有るものが無しになるのは、はずかしいことかもしれないけれど。オマンコをさらして（正確には、名札でかくして）大手をふって（正確には、しばられているときが多い）外を歩かされてるんだ。毛なんか、小さな問題ですらない。それに——モジャモジャとツルツルなら、ツルツルのほうが可愛いぞ。

だけど。オマンコの毛って、万本単位らしい。一本をぬくのには三秒としても、五万秒とか十万秒。二十四時間不明不休でも、七万六千二百秒。毎日根気良く続けるしかない。そ

れに、あせてたくさんぬいたら、はだが荒れるだけでなくオデキになった。

オマンコの毛だけでなく、わきの下もすねもぬいてしまえというのが、大だんな様の命令だった。

ご主人様と大だんな様の命令とが相反したら、サチはどうして良いか分からなくなるけど、これはご主人様の命令に輪をかければ大だんな様の命令になるから、なやむことはなかった。ただ、まるまる一週間が、つぶれただけだった。これからも、ちまちまとつぶれるんだろうな。

サチが登校を許された——ていう言い方はちがうな。出来れば学校へなんか行きたくない。とも言い切れない。お屋しきに居る間は、サチで遊んでくれるのは大だんな様とご主人様だけだし、穴を使うばかりで、痛いことやはずかしいことは、あまりしてくれない。

大だんな様がサチを使った後には、もれなくおく様のセッカンが付いてくるけど、これはなぜか、ちっともエツ逆しない。

「今日のうちに、聡子をおこらせるんだぞ」

謝るけれど、行ないを改めたりはしないと宣言して、リンチを受けろって意味。ご主人様が喜ぶ（性的に大興奮する）んだから、サチはがんばるつもりだけど、やっぱり気が進まないな。

聡子は女子で、腕力はサチ以下だと思う。そんなやつにいじめられるなんて、いやだ。そりゃ、親の六光りでサチを支配する資格はあると思うけど……やっぱり、ご主人様とは絶対に根本的に（男と女という意味じゃなくて）何かがちがう。

ええい、考えても頭がこんぐらかるだけだ。聡子だってバカじゃないだろう。内心の反発をかくしての謝罪なんて、見破るだろう。そして、サチをリンチする。ご主人様の思わく通りになるんだから、それでいいや。

というわけで。放課後に、聡子が親衛隊に守られて教室から出ようとするところをねらって、ろう下に土下座したんだ。

「ごめんなさい。サチがまちがっていました。許してください」

一同あっけに取られて。それでも聡子は、予定通りの反応をしてくれた。

「そう。それじゃ、もう男子とエッチなことはしないでちょうだい。山持くんの言いつけだとしても、せめて水着で登校するとか、はだかだけはやめてよね」

へええ、水着。それは考えたこともなかったな。学校ならともかく、町中とかだったら、すっぱだかよりはずかしいかも。なんて余計なことは、後回し。

「いやだよ」

男言葉で、きっぱりと。

「服を着たら、名札のピアスがこすれて痛いんだ。それに、男子がかまってくれるのが、サチはうれしいんだ。聡子だって、男子にチャホヤされたいんだろ。サチの真似でもしてみろよ」

計算通り。青オニがハンニャの面をかぶったおく様そっくりの形相になった——のは、いっしゅんだけだった。すうっと、真っ白な能面になった。

「あなたは、痛いことやはずかしいことやエッチなことをされると喜ぶ変態のま女だそうね。わざわざ喜ばせたりはするもんですか」

ご主人様だけでなく男子全員が言ってるんだから、そういうふうに誤解（でもない）されても当然だな。でも、ま女って。生半可な知識の見本だ。

「どこまで、そんな態度を続けられるか、見届けてあげるわ」

捨て台詞みたいなことを言って、うんと大回りをしてサチをよけて、にげてった。

これにて一件落着——にはならなかった。翌日から因質なイジメが始まった。

授業が終わっても教科書を出していたら。

「あら、ごめんなさい」

わざとつくえにぶつかって、どさくさに教科書をはたき落して。

「きやつ……」

通りかかりましたって顔で別の子が教科書をふんづけて破ったり。



給食の配ゼんのときに、熱いおかずをわざとお股目がけてこぼされたり。パンを配り忘  
れられたり、逆にみんながきらいな納豆とか牛乳とかは、次から次へとおかわりさせられ  
た。

「先生。白江さんがいつも見学なのはかわいそうです。いっしょに授業を受けさせてあげ  
てください」

体育にも強制参加させられて。ドッジボールは集中こうげき。ランニングのときなんか、  
となりの子がわざと腕を横にふって乳首の名札をひじではじいたり、前の子がねらいすま  
してコチンコの名札をはいたり。

短きより走のときは。

「白江さんは足が速いからハンデね」

三つの名札に大きな目玉クリップを着けられて。ゆっくり走れば、すこしは楽なんだけ  
ど、サチも意地になってきちんと全力しっ走する。これ、痛いのもより気持ち良いのが大き  
かったな。

全部が聡子の悪意から発していることだけど、女子にいじめられろっていうご主人様の  
命令を実行してるんだと思えば、胸きゅんきゅんのお股じゅくじゅくになっちまう。短き  
より走のときなんか、おもらししたみたいに太腿がぬれちまった。

体育でのイジメは、たいていサチがエツ逆しちまって、さすがにそれは女子に分かるか  
ら、同じことは二度とされなかった。

でも、ランニングと短きより走は、男子のサチ遊びに採り入れられた。手で名札をはた  
くんじゃなくて木の棒とかこっそり持ち出した教べんを使ってくれたし、短きより走は目  
玉クリップが名札ひとつにつき三つとかに増やしてくれた。

体育は良かった（かなあ？）し、教科書なんか無くたって性どれいに学問は不要じゃな  
いかと投げやりになってきてたし。給食ではいやがらせをされても、残飯をたらふく食え  
た（サチは牛乳が好きだし、納豆だって平気だ）から、我まんできたけど。いちばん困っ  
たのはトイレ。

使わせてくれない。授業が終わったら、たいていは三人くらいが交代でサチのつくえを取り囲むか出入り口に立ちはだかって、サチをトイレに行けなくする。給食後の自由時間は、二人くらいがトイレの前で見張り番。ケンカすれば勝てるけど、ご主人様に禁止された。

何本も牛乳を飲まされてるから、我まंदできるわけがない。給食後の自由時間に校庭のすみで、こそこそと済ませ——たいのに。今度は男子が付いてきて、真正面から見物しやがる。立小便までさせられたぞ。ビビンチョだのバッチイだのはやし立てられても平気になっちまった（ということにしておく）。

さいわいに、女子からのイジメは長く続かなかった。イジメが終わったんじゃなくて、学校が夏休みになったからだ。

そして夏休みは——男子にたくさんいじめられて可愛がってもらった。

※続きは製品版でお楽しみください。